静岡県埋蔵文化財センター

研究紀要

第３号

2014

論　文

古墳時代後期～終末期の鑣轡の新例
－菊川市篠ヶ谷 SA８号横穴墓出土轡の復原－……（１）
大谷　宏治

静岡県の後期古墳における脚付長頸壺……（11）
田村　隆太郎

研究ノート

古代の水滴に関する一試論……（23）
丸杉　俊一郎

資料紹介

藤枝市中ノ合遺跡から出土した扉板について……（29）
中川　律子

序

静岡県埋蔵文化財センターは平成23年４月の発足から、平成26年度で４年目を迎えました。

県民の歴史的・文化的資産である文化財を保護し（守る）、地域固有の文化に対する誇りと愛着をもつ県民意識を醸成し（育てる）、文化財の価値を未来へ継承する（つなげる）。この「守る・育てる・つなげる」をコンセプトとして、静岡県埋蔵文化財センターは公共事業に伴う発掘調査と資料整理、出土品及び記録類の管理、埋蔵文化財を用いた普及啓発活動に取り組んでおります。

近年のセンターの調査業務に目を向けると、平成24度の浜松市浜北区篠場瓦窯跡、平成25年度の藤枝市寺家前遺跡、長泉町東野遺跡をはじめとして、新東名建設に係る発掘調査の成果が報告書として刊行されました。

このうち、篠場瓦窯跡では資料整理の過程で、人名の書かれた瓦が見つかり、奈良時代の資料では全国的にも珍しい例として注目されました。

一方、普及啓発活動では県立中央図書館や静岡市登呂博物館などの他機関との連携による展示や体験活動を推し進めております。

特に県立中央図書館内では埋蔵文化財センター常設展示「古代からの贈り物～発掘調査から知る静岡県の歴史～」において、これまで30年近くに渡って蓄積された資料を広く公開しております。

研究紀要も第３号を刊行することとなり、主に古墳時代から古代の論文、研究ノート及び、資料紹介を４編収録することができました。

研究紀要は当センターの職員が日常業務と並行しながら、専門分野における研究活動の一端を発表するものであり、当センターの情報発信の一つの柱でもあります。

日頃の調査業務をはじめ、今回の研究活動に御理解・御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書が広く活用され、歴史、文化に関わる研究に資することができれば幸いです。

平成26年12月

静岡県埋蔵文化財センター所長　赤石　達彦

目　次

序 …… 赤石　達彦

論　文

◇古墳時代終末期の鑣轡の新例
　　－菊川市篠ケ谷 SA ８号横穴墓出土轡の復原 …… 大谷　宏治　（１）

◇静岡県の後期古墳における脚付長頸壺 …… 田村　隆太郎　(11)

研究ノート

◇古代の水滴に関する一試論 …… 丸杉　俊一郎　(23)

資料紹介

◇藤枝市中ノ合遺跡から出土した扉板について …… 中川　律子　(29)

【論文】

古墳時代終末期の鑣轡の新例

－菊川市篠ヶ谷 SA ８号横穴墓出土轡の復原－

大谷　宏治

要旨　菊川市篠ヶ谷 SA ８号横穴墓からは銜先環が「二重銜先環」の轡と、頸部が長く特殊な構造を有する鉸具が出土しているが、轡の形式が不明確である。これらの特徴的な部品は古墳時代の馬具の轡の部品としては類例の少ないものであることから、「二重銜先環」を有する轡や鉸具を有する馬具（特に轡）と比較検討し、当横穴墓出土轡は、鉸具造立聞で有機質鑣を有する鑣轡である可能性が高いと想定した。

キーワード：篠ヶ谷 SA ８号横穴墓　二重銜先環　鉸具造立聞　鑣轡　古墳時代後期～終末期

１　はじめに

筆者は鉄製環状鏡板付轡（以下、円環轡）の研究を進めているが、1980 年代に調査が実施された静岡県内の円環轡の再調査を実施していた。その中で、報告書の図面を見る限り「銜介在型」（註１）で、鉸具も出土していることから鉸具造立聞円環轡と判断していた静岡県菊川市篠ヶ谷 SA ８号横穴墓（以下、SA ８号墓とする）出土の轡を実見するに当たり、「遊環」が銜先環に鍛接される､いわゆる「 固定式遊環 」構造(諫早 2010）をもつ轡であること、鉸具の頸部に半円形の切り込み（窪み)、あるいは円形の穿孔が存在する可能性が高いことがわかり、その判断が誤りであったことを認識した。そこでこの轡の特徴を筆者が集成した 1000 例以上の円環轡と比較したが、同様の類例はなく、SA ８号墓出土の轡は円環轡ではない可能性が高いことが判明した。

なお、以下の分析に当たり、銜の中央でもう一つの銜と連結される部分（「銜内環」とされることがある）を啣金、銜の外側にあり、鏡板や引手が接続する部分を銜先環とする。また、いわゆる「固定式遊環」について、「遊環」は銜先環とは別に作られた環状の金具で、銜先環から遊離していることが前提の名称であるため、諫早直人氏が指摘するように「固定式遊環」は用語として違和感がある（諫早 2012- 註 42)。小論では、いわゆる「固定式遊環」（註２）とされるものを、銜先環が二重に作られていることから、「二重銜先環」と仮呼する。また､「二重銜先環」の内側の環を「内環」、外側の環を「外環」と仮称する（図 1)。

このような「二重銜先環」を有する馬具は金銅装馬具や鑣轡の一部に採用される構造であり、本横穴墓例はその両者の可能性が想定できること、また、鉸具の頸部に円孔を有するもの、切り込みを有するものは少ないことから、これらの馬具との比較を通じて篠ヶ谷 SA ８号墓出土轡を復原したい。

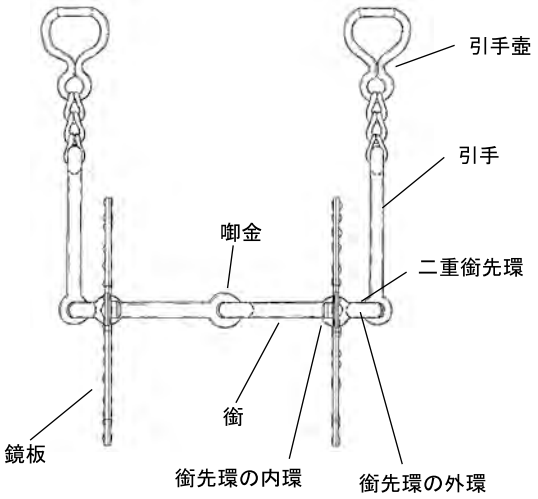


図１　轡の部位名称

２　篠ヶ谷 SA ８号横穴墓出土馬具について

（１）横穴墓の概要

立地　篠ヶ谷横穴墓群（明星大学 1983）は、ＪＲ東海道線菊川駅から北北西に約 450 m、菊川市堀ノ内に位置する、菊川の支流の西方川北岸の丘陵尾根斜面に開削された横穴墓群（図 2）で、２支群 19 基で構成される。篠ヶ谷 SA ８号墓は、この２支群中のＡ支群に属す横穴墓である。

図２　篠ケ谷横穴墓群と関連する横穴墓の位置

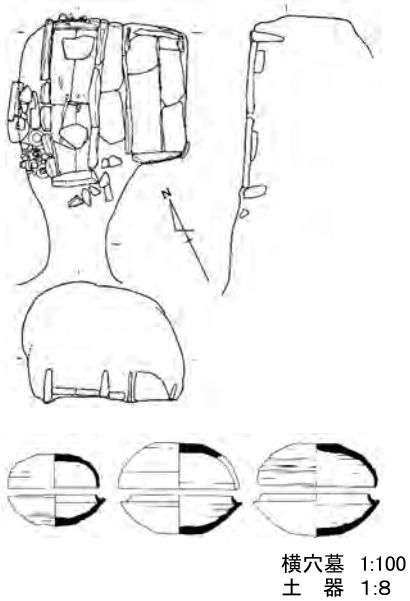


図３　篠ケ谷 SA ８号横穴墓の構造と出土須恵器

当横穴墓群の南西に大淵ヶ谷横穴墓群（３支群 37 基)、その東側に西宮浦横穴墓群（１支群２基）などが所在する（図 2)。

構造　篠ケ谷 SA ８号墓（図 3）は、菊川流域に特徴的なドーム形天井であったと想定でき、平面形はやや横長の長方形で、左袖は明瞭な袖を形成し、右袖は斜角である。横穴墓内に造付箱形石棺を設置するために右側袖部を取り払って拡張したようにも看取できる構造である。横穴墓の全長は 3.5 m以上、最大幅 2.2 m、残存高 1.7 mである。玄室内には横穴墓の長軸に平行して造付組合式箱形石棺２基が設置されている。

出土遺物　馬具片７片（轡２組の可能性が高い)、耳環３、玉類（切子玉４・棗玉５・管玉１)、鞘尻あるいは柄頭１、大刀１、刀装具１、鉄鏃３点以上、須恵器（杯蓋 18・杯身 13・碗２・小型壺１・直口壺１・平瓶１・高杯１・甕２）が出土している。

横穴墓の築造時期　出土した須恵器は２時期に区分でき、古いほうは遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期，鈴木 2001）で開削段階に比定できる。一方、新しいほうは遠江Ⅳ期前半（飛鳥Ⅱ期）に位置づけることができることから、この時期に追葬が行われた可能性が高い。

（２）馬具の特徴

篠ヶ谷 SA ８号墓からは､轡２組分(の可能性が高い)と鉸具が出土している（現状で６点確認)。

轡　轡２組分のうち１組目（轡Ａ，図４－１・２）は、いわゆる銜先に円環が２つ連接されるもので、筆者が「二重銜先環」とする構造である。

１は銜と引手が残存する。銜は二連銜の可能性が高く、片側が喞金から二重銜先環まで残存し、銜先環の外環に引手が接続する。鏡板（あるいは鐎）は内環に装着されていた可能性が高いが残存していない。銜先環の外環は内環よりも一回り小さい。残存状況が良好ではないため確定ではないが、残存する銜（１）は全長 11.6 ㎝前後に復原可能である。銜先環は内環が直径 3.0 ㎝前後、外環は 2.6 ㎝前後に復原できる。外環に繋がれる引手は一条線引手で、引手壺はく字形に折り曲げられている。引手残存長 11.7 ㎝であり、12 ㎝程度に復原できる。

銜（２）は銜先環のみの残存であり、１と同様二重銜先環であることから本来は１と同一個体であった可能性が高い。２は銜先環の内環 2.8 ㎝前後、外環 2.4 ㎝前後に復原できる。

なお、銜先環２の外環には薄い鉄板が錆着している。鉄製で花形のように見えることから、その観察が正しければしおでの座金具等の可能性がある。

もう一組（轡Ｂ、４・５・６）の轡鏡板と想定する４は弧を描き、弧の外縁に鍛接された部分が残存することから、立聞が鍛接された（造付立聞）円環轡の可能性が高いと判断した。篠ヶ谷 SA ８号墓は７世紀代に開削された横穴墓である可能性が高く、この時期の造付立聞は大型矩形立聞か鉸具造立聞円環轡が圧倒的に多いことから判断して、この２者のどちらかと判断した。また、立聞孔がある可能性が高いことから大型矩形立聞円環轡の可能性が高い。

つづいて、５は引手であるが、残存長が 12.6 ㎝で

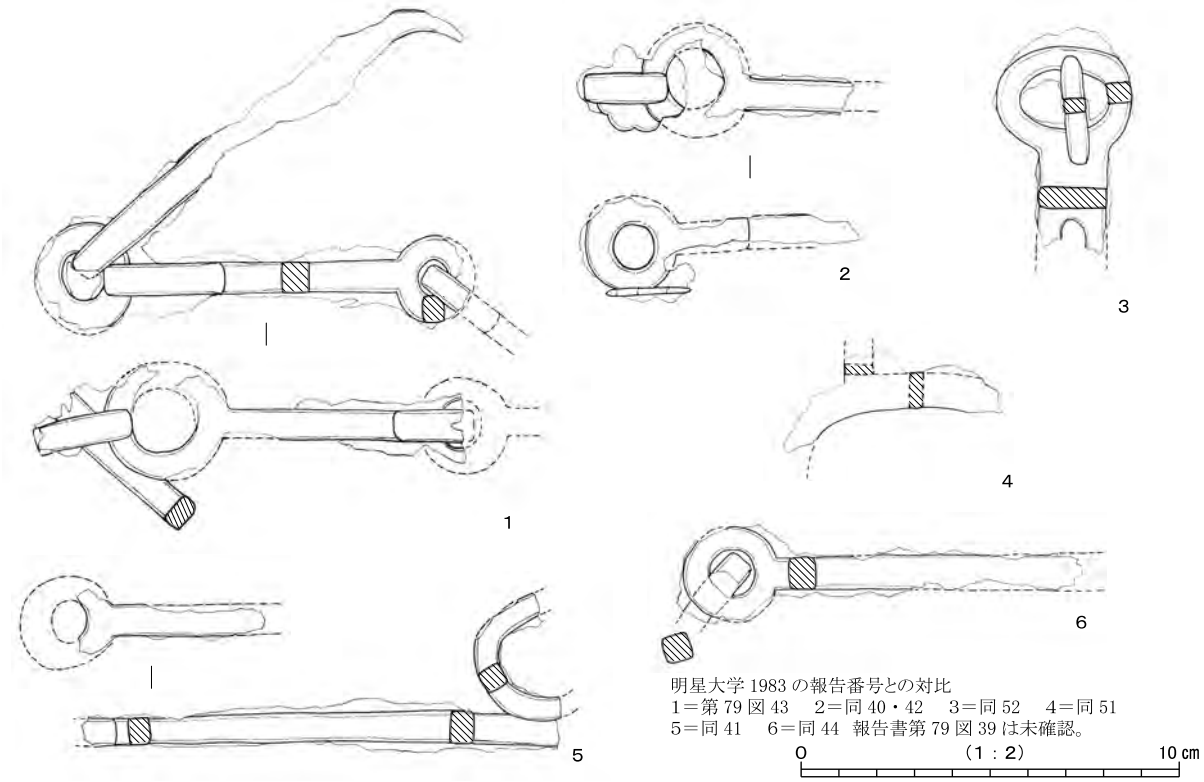


図４　篠ケ谷 SA ８号横穴墓出土馬具実測図

あり、15 ㎝以上に復原できる。轡Ａの１の引手（12 ㎝前後）よりも長いことから、轡Ａの轡に伴う可能性は低い。つまり、５は轡Ｂに伴う可能性が高い。さらに、６は引手の可能性が高いが、轡Ａに伴うとした場合、連結する可能性のある２の銜先環の外環はほぼ完存する一方で、６の引手環には銜先環と想定する環の一部が残存している。したがって、２と６は連結しないため、轡Ａとは別個体と判断し、轡Ｂに伴うものと判断した。引手残存長 10.4 ㎝である。

鉸具　上記轡とともに鉸具（３）が出土している。鉸具の頸部が長く、下部に半円形の切り込み（窪み）が確認でき、二股（二脚）に分かれている。この部分は円孔の可能性を完全に否定はできないが、円孔としては幅６㎜と広いことから、円孔の可能性は低く、切り込みの可能性が高いと判断した。

鉸具（頭部）と頸部は一体で製作されている。刺金は頸部の先端に取り付けられている。錆のためＴ字形刺金か蕨手状刺金かの判断はできない。残存長 5.4 ㎝、鉸具（頭部）部分の長さ 2.6 ㎝、幅 3.6 ㎝、頸部残存長 2.8 ㎝、幅 1.8 ㎝、切り込み部分の幅７㎜、切り込みの深さ８㎜以上である。

３は鉸具造立聞円環轡の鉸具のようにも見えるが、それらの鉸具の下部に穿孔や切り込みは確認できないこと、SA ８号墓例の頸部が長いことから、鉸具造立聞円環轡の鉸具と断定することはできない。

二重銜先環をもつ轡の復原に向けて　上述した轡Ａと鉸具の特徴から、前者では「二重銜先環」の轡を手掛かりに、後者では切り込みを有する鉸具の類例を手掛かりに復原する必要があり、最終的に両者の特徴を有する轡を探し出すことで復原の妥当性を高めることが重要である。

３章以下では、「二重銜先環」と、鉸具を有する馬具（轡）をもつ事例と比較検討したうえで、篠ヶ谷 SA ８号墓出土轡Ａの復原を行いたい。

３　「二重銜先環」をもつ轡

（１）「二重銜先環」の分類

「二重銜先環」（表１，図 5）には、銜先環の内環と外環が直交して接続するもの（二重銜先環Ａ類）と、内環に平行して外環を取り付ける「８」字形に接続するもの（二重銜先環Ｂ類）の２種類が確認できる。

Ａ類は篠ヶ谷 SA ８号墓例や、静岡県石ノ形古墳（図５－２）、同高根森８号墳（図５－ 16）、同半兵衛奥古墳（図５－ 17）などの事例がある（註３）。一方、Ｂ類は、愛知県名古屋市熱田神宮蔵十字文透心葉形鏡板付轡（図５－９）がある。Ｂ類に関しては日本列島で

表１　二重銜先環をもつ轡

遺跡名	所在地	市町村	轡の種類	タイプ	引手	内環外環	立聞	時期	文献
浜井場古墳	福島	福島市	不明	交差式	一条線？	同大	－	古墳中期後半？	1
亀塚古墳	東京	狛江市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	2
三珠王塚古墳	山梨	中央市	f字形	交差式	－	同大	矩形	古墳中期後半	3
石ノ形古墳	静岡	袋井市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	4
キラ土古墳	三重	伊賀市	f字形	交差式	別造	外環大	矩形	古墳中期後半	5
倭文6号墳	鳥取	鳥取市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	6
宮脇古墳	福岡	飯塚市	f字形	交差式	別造	同大	矩形	後期前半	7
本郷野開102号土壙墓	福岡	大刀洗町	f字形	交差式	別造	同大	矩形	古墳中期後半	8
番塚古墳	福岡	苅田町	f字形	交差式	別造	同大？	矩形	中期末～後期初頭	9
鍬形原古墳	長野	松本市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	古墳後期前半	10
北本城古墳	長野	飯田市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	古墳後期前半	11
巨勢山75号墳	奈良	御所市	内湾楕円	交差式	別造	同大	矩形	MT15～TK10	12
寺口忍海H32号墳	奈良	葛城市	心葉形	交差式	別造	外環大	矩形	TK10	13
小畑3号墳	鳥取	岩見町	心葉形	交差式	一条線	外環大	矩形	TK209～	14
熱田神宮蔵	日本	名古屋市？	心葉形	8字式	―	内環大	矩形	6世紀前半	5
宮中野99-1号墳	茨城	鹿嶋市	鑣轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式?	7世紀後半	15
奈良ソ号墳	群馬	沼田市	鑣轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式?	7世紀後半	16
綿貫観音山古墳	群馬	高崎市	鑣轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK43-TK209	17
八幡観音塚古墳	群馬	高崎市	鑣轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK209	18
コウモリ塚古墳	長野	岡谷市	鑣轡	交差式	一条線	外環大	鉸具造	7世紀後半	20
半兵衛奥古墳	静岡	静岡市	鑣轡	交差式	円環？	内環大	鉸具造	7世紀後半	20
花沢出土	静岡	焼津市	鑣轡	交差式	円環	同大？	板状掛留式	－	21
高根森8号墳	静岡	島田市	鑣轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	TK209	22
篠ヶ谷SA8号横穴墓	静岡	菊川市	鑣轡	交差式	一条線	内環大	鉸具造	飛鳥Ⅰ～Ⅱ	本論
八代神社蔵	三重	鳥羽市	鑣轡	交差式？	円環	－	板状掛留式	8世紀	23
新鳳洞92-83号墳	韓国	清州	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	24
水村里Ⅱ－4号墳	韓国	公州	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	24
笠店里86-1号墳	韓国	益山	楕円形	交差式	一条線	同大	矩形	5世紀	25
福泉洞(東)1号墳	韓国	釜山	楕円形	交差式	－	－	矩形	5世紀	26
造山古墳	韓国	海南	f字形	交差式	別造	外環大？	矩形	6世紀前半	27
宋山里古墳	韓国	公州	(未確認)	交差式	－	－	－	5世紀	24
松潭里25号墳	韓国	燕岐	鑣轡	交差式	一条線	同大	板状掛留式	5世紀	24
池山洞32号墳	韓国	高霊	鑣轡	交差式	一条線	内環大	半円形？	5世紀末	28
馬甲塚	韓国	咸安	鑣轡	交差式	一条線	内環大	板状掛留式	5世紀	29
火旺山城	韓国	昌寧	鑣轡	交差式	二条線	同大？	板状掛留式	統一新羅時代	25
雪峰山城	韓国	利川	鑣轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
彦南里	韓国	龍仁	鑣轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山城	韓国	扶余	鑣轡	交差式	円環	内環大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山城	韓国	扶余	鑣轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
扶蘇山麓採集品	韓国	扶余	鑣轡	交差式	二条線	外環大	－	統一新羅時代	25
弥勒寺	韓国	益山	鑣轡	交差式	二条線	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
馬老山城	韓国	光陽	鑣轡	交差式	円環	内環大	板状掛留式	統一新羅時代	25
塔里採集品	韓国	慶州	鑣轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
啓明大学校所蔵品	韓国	－	鑣轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25
伝朝鮮半島南部	韓国	－	鑣轡	交差式	円環	同大	板状掛留式	統一新羅時代	25

※タイプ＝二重銜先環の種類　交差式＝二重銜先環A類　8字式＝二重銜先環B類

は本例のみの可能性があり、このほかに確認できたとしても数量は非常に少ないと想定される。

なお、二重銜先環ではないが、Ｂ類に近いものとして三重県伊賀市前山古墳（東海古墳文化研究会 2006）の十字文透心葉（方形）形鏡板付轡（図５－10）や群馬県高崎市（旧榛名町）しどめ塚古墳の十字文楕円形鏡板付轡（群馬県古墳時代研究会 1996）のように８字形の遊環が確認できる（註４）。

（２）「二重銜先環」Ａ類を有する轡の特徴

篠ヶ谷 SA ８号墓例は「二重銜先環Ａ類」であることから、Ａ類を中心に比較検討する。

板状鏡板付轡　Ａ類の代表例は、ｆ字形鏡板付轡である。静岡県石ノ形古墳（図５－２）、三重県キラ土古墳など日本列島内で少なくとも８例が確認できる（表１）。また、長野県飯田市北本城古墳（図５－４）、奈良県御所市巨勢山 75 号墳（図５－６）などの金銅装内湾楕円形鏡板付轡で確認できる。さらに、奈良県葛城市寺口忍海 H32 号墳出土の心葉形鏡板付轡（図５－７）に確認できる。これらの事例は、いずれも別造り引手壺を有するもので、時期的には５世紀後半～６世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

これ以外では、鳥取県小畑３号墳出土の鉄製心葉形鏡板付轡（図５－８）がある。時期は TK209 型式期以降に位置づけることができ、篠ヶ谷 SA ８号墓例よりも須恵器で１型式古いか、ほぼ同時期に位置づけることができる。

また、この二重銜先環Ａ類は、韓半島で確認されている（諫早 2012）。金銅装馬具では公州新鳳洞 92-83 号墳、益山笠店里 86-1 号墳などで出土した金銅装楕円形鏡板付轡に確認できる。また、海南造山古墳から出土したｆ字形鏡板付轡が挙げられる（註５）。韓国で出土する二重銜先環Ａ類に伴う板状鏡板付轡は、日本と同様ｆ字形鏡板付轡と内湾楕円形鏡板付轡であり、

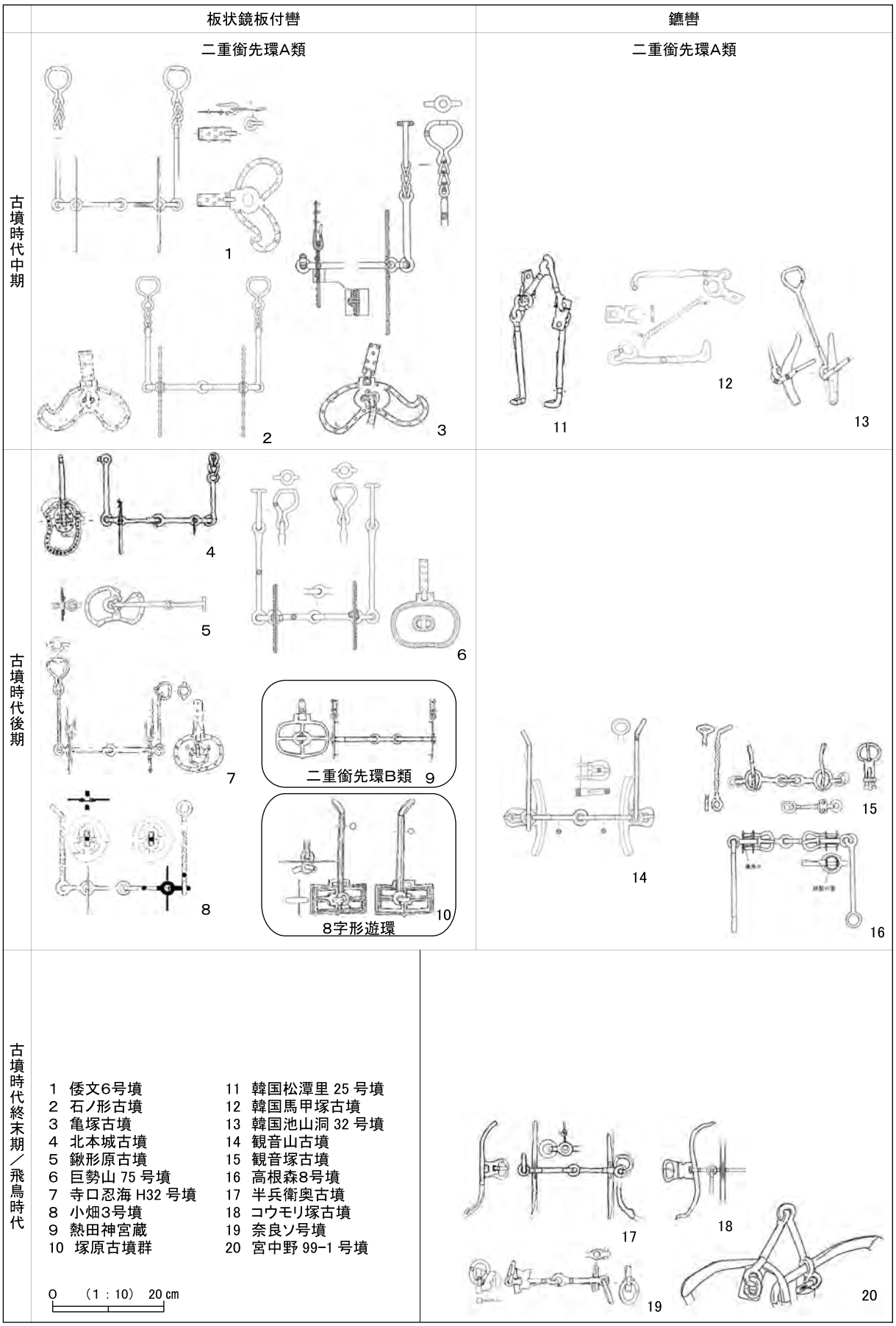


図 5 二重銜先環をもつ轡の編年的位置

百済と伽耶地域で出土している（諫早 2010）。時期的には５世紀から６世紀初頭ごろに位置づけられる可能性が高い（諫早 2010・2012、権 2013、註６）。つまり、韓半島と日本列島ともに同形式の轡に二重銜先環Ａ類が採用されており、馬具生産にあたって関係が深かったことがうかがえる。

これまでにみてきたように、金銅装板状鏡板付轡については、篠ヶ谷 SA ８号墓と時期的に隔たりがあり、かつ日本列島出土の二重銜先環Ａ類を有する金銅装板状鏡板付轡とは引手壺の構造にも差異が確認できることから、篠ヶ谷 SA ８号墓例と直接的に関係があるとは考え難い。

一方、篠ヶ谷 SA ８号墓に近い時期の板状鏡板付轡は、小畑３号墳の鉄製十字文透楕円形鏡板付轡である。小畑３号墳の二重銜先環は、銜先環の内環が 2.4 ㎝、外環が 2.8 ～ 3.0 ㎝と引手を取り付ける外環の環のほうが大きい点が異なる。また、板状鏡板付轡では、篠ヶ谷 SA ８号墳と同時期のものは本例のみであり、直接的な影響があるかどうかの判断は難しい。

鑣轡　二重銜先環を有する轡は、上述した板状鏡板付轡のほか鑣轡に多く確認できる（表１）。

群馬県観音山古墳（図５－14）、同観音塚古墳（図５－15）、静岡県高根森８号墳（図５－16）など TK43 ～ TK209 の時期に位置づけられるものと、長野県コウモリ塚古墳（図５－18）や静岡県半兵衛奥古墳（図５－17）など７世紀後半～８世紀前半ごろに位置づけられるものが確認できる。

韓半島でも二重銜先環をもつ鑣轡が、燕岐松潭里 25 号墳（図５－11）、咸安馬甲塚古墳（図５－12）高霊池山洞 32 号墳（図５－13）などで出土しており、５世紀代に位置づけられる（諫早 2012）。

また、韓半島では統一新羅時代の、昌寧火旺山城や扶余扶蘇山城出土例など鑣轡にも二重銜先環を有する鑣轡が確認されている（諫早 2012）。統一新羅時代の鑣轡は７世紀後半以降に位置づけられること、引手が二条線引手あるいは円環引手であること、金属製鑣轡であるなどの差異が確認できる。

したがって、二重銜先環を有する鑣轡は韓半島のものが時期的に５世紀代と７世紀後半以降に位置づけられているため直接的な関連性は低いと想定できる一方で、板状鏡板付轡とは異なり、日本列島内で出土した二重銜先環を有する鑣轡のうち観音山古墳や高根森８号墳は６世紀後半から７世紀初頭、半兵衛奥古墳などは７世紀後半～８世紀前半ごろに位置づけられ、篠ヶ谷 SA ８号墓の開削時期と想定される７世紀前半を前後する時期に確認されている。さらに、二重銜先環をもつ鑣轡が９例出土している。同時期の板状鏡板付鏡板付轡よりも二重銜先環を有するものが多く、量的にみれば篠ヶ谷 SA ８号墓例は鑣轡の可能性が高くなる。

また、日本列島出土の二重銜先環を有する鑣轡のうち、観音山古墳、半兵衛奥古墳、コウモリ塚古墳など９例中７例は金属製鑣である。篠ヶ谷例も金属製鑣を伴う可能性は排除できないが、金属製鑣は出土していないため、金属製鑣轡である可能性は低い。一方で、観音塚古墳、高根森８号墳例は有機質製鑣である。篠ヶ谷例が鑣轡であるとすれば、有機質製の鑣を有する鑣轡の可能性が高い。なお、この２例は鑣を取り付ける銜先環の内環が外環よりも大きいという特徴が確認でき、この特徴は篠ヶ谷 SA ８号墓とも合致する。

４　鉸具を伴う遺物

（１）鉸具を伴う遺物

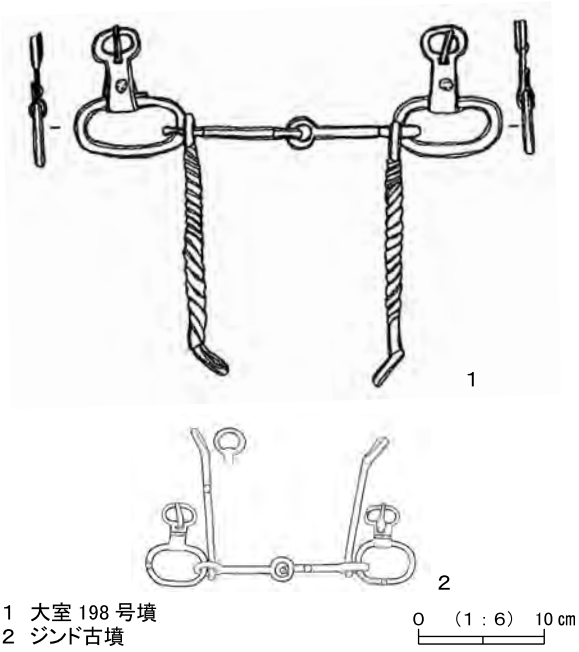
鉸具を有する遺物は、轡の立聞・杏葉・障泥金具・鉸具などの馬具のほか、腰帯金具・銙帯金具のバックルなどが確認できる。篠ヶ谷 SA ８号墓出土の鉸具は、鉸具部分（頭部）の外枠と頸部が一体で製作され、刺金のみが可動する構造で、頸部以下が欠損したものである。つまり、頸部をもたない外枠と刺金だけで構成される鉸具とは形状が異なる。また、帯金具のバックルと篠ヶ谷 SA ８号墓の形状が大きく異なることや、鉸具以外に腰帯金具に伴う遺物が出土していないことから帯金具の可能性は低いため、ここでは馬具の可能性が高いと考えて分析する。

（２）鉸具造立聞を有する馬具

鉸具造立聞を有する馬具には、円環轡、鑣轡のほか、杏葉、障泥金具がある。筆者の感覚では、円環轡・杏葉・障泥金具の鉸具の頸部は基本的に２㎝以下と短い。杏葉・障泥金具は、高崎市観音塚古墳の杏葉（高崎市教委 1992）や、静岡県長泉町原分古墳（静岡県埋文研 2008）の障泥金具のように頸部は短く、また鉸具（頭部）が可動する構造になっていることが多く、篠ヶ谷 SA ８号墓例とは大きく異なる。

一方で円環轡・鑣轡の中に２㎝を超えるものがあるため、それらとの比較を行いたい。

鉸具造立聞円環轡　鉸具造立聞円環轡の鉸具は通常刺金を固定するための円孔以外に頸部に孔が穿たれることはなく、切り込みを入れられることもない。鉸具



1 大室 198 号墳
2 ジンド古墳

図６　長い頸部を有する鉸具造立聞円環轡

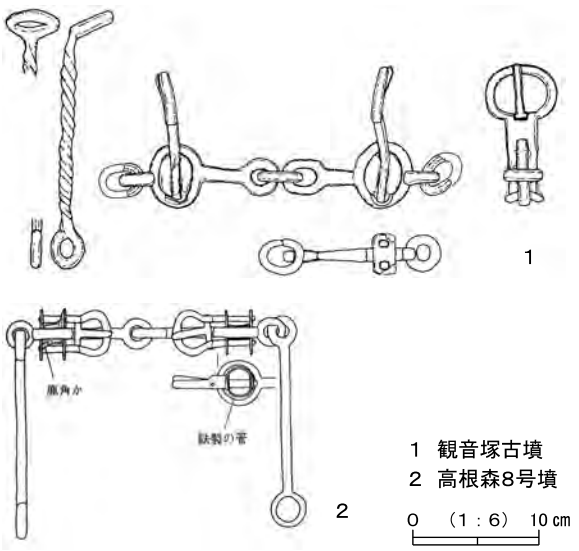
は直接鏡板に鍛接されるため、特に円孔や切り込みは必要ない。

しかし、長野県大室 198 号墳例は、楕円形環に別造りした鉸具の頸部をＵ字形に折り曲げ、環を挟み込み、環（鏡板）の脱落を防ぐため頸部を鋲留めする（図６－１）。この鋲が抜け落ちれば円孔として残存する可能性が高い。ただし、大室 198 号墳例の鋲頭が６㎜ほどであり、鋲脚はもう少し幅が狭いものと想定できることから、脚部の幅が６㎜ある篠ヶ谷 SA ８号墓例とは用途が異なる可能性が高い。また、この轡の銜先環は二重銜先環ではなく、通常の単環の銜先環である。

また、京都府ジンド古墳（図６－２）は頸部が長い鉸具造立聞であるが、頸部に穿孔はない。また、銜先環は二重銜先環ではなく、通常の単環の銜先環である。したがって、両者とも鉸具の形状は類似するものの全体的な特徴は篠ヶ谷 SA ８号墓例とは異なる。

鑣轡　鉸具造立聞を有する鑣轡は８例確認できる。群馬県高崎市観音山古墳（図５－14）や長野県岡谷市コウモリ塚古墳（図５－18）のように鉄製鑣に直接鍛造あるいは嵌めこまれるものと、群馬県高崎市観音塚古墳（図５－15）や静岡県高根森８号墳（図５－16）、群馬県藤岡市本郷出土品（和田 1917）、福岡県新行坊古墳（嘉穂町教委 1981）のように有機質の鑣に嵌めこまれるものが確認できる。また、頸部がやや長い２㎝以上と長いものが多い。

特に観音塚古墳例や藤岡市本郷出土品は有機質の鑣を有する鑣轡の鉸具の頸部が二股に分かれ、銜先環の



1 観音塚古墳
2 高根森8号墳

図７　篠ケ谷 SA ８号墓出土轡Ａと関連する鑣轡

内環をその切り込み（二股）部分に嵌めこみ、さらに内環に装着された有機質の鑣に嵌めこまれるものである。また、これらの鑣轡のうち、藤岡市本郷出土品、福岡県新行坊古墳以外はいずれも二重銜先環をもつものである。さらに、有機質鑣を有する観音塚古墳例、高根森８号墳例ともに、二重銜先環の環径よりも銜先環の環径の方が大きいという特徴が確認できる。したがって、篠ヶ谷 SA ８号墓例は鉸具においても鑣轡との関係が深いといえる。

５　篠ヶ谷 SA ８号横穴墓出土轡の復原

篠ヶ谷 SA ８号墓出土二重銜先環を有する轡と、頸部の長い鉸具をもつ馬具について類例をみてきた。

前者は、板状鏡板付轡と鑣轡に確認できるが、前者のうち金銅装板状鏡板轡は５世紀～６世紀前半に収まるものであり、時期が大きく異なることなどから直接的な関係を見出すことは難しい。前者のうち鉄製板状鏡板付轡をもつ小畑３号墳例が同時期であるが、１例のみであり、二重銜先環が板状鏡板付轡に主体的に用いられたとするには躊躇する。また、板状鏡板付轡の事例は、銜先環の内環と外環の両者がほぼ同径か、外環の方がやや大きい傾向にある。したがって、板状鏡板付轡とは形状が異なることから板状鏡板付轡の二重銜先環の影響を直接的に受けているとは考え難い。

一方で、篠ヶ谷 SA ８号墓と前後する時期の鑣轡は、基本的に二重銜先環である。特に有機質の鑣轡を有する観音塚古墳例や高根森８号墳例は鉸具を立聞として採用する鑣轡である。篠ヶ谷 SA ８号墓例は二重銜先環と、頸部が長く、二股に分かれる特徴を有する鉸具

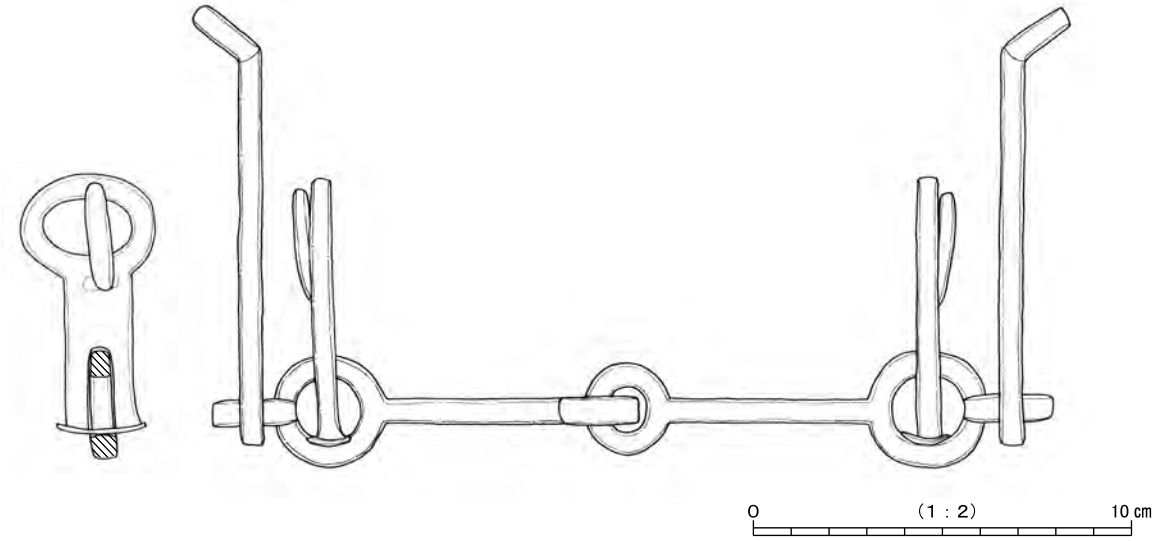


図８　篠ケ谷 SA ８号横穴墓出土鑣轡（轡Ａ）復原図

の二つの特徴を有している。また、篠ヶ谷 SA ８号墓例は、内環が、外環よりも５㎜ほど大きい。鑣轡は、特に有機質の鑣の場合は、鑣を嵌めるため、引手を絡める外環よりも大きい内環が要求された可能性が高いが、この特徴もこの２例と一致する。

つまり、ここまでに検討したように、篠ヶ谷 SA ８号墓では金銅装轡をはじめ金銅装馬具が出土していないことなども考慮して、篠ヶ谷例を復原するとすれば、観音塚古墳および高根森８号墳出土鑣轡（図７）を参考に、二重銜先環を有し、鉸具造立聞付の有機質鑣を有する鑣轡に復原できる（図８）。

６　結語

轡の復原　篠ヶ谷 SA ８号墓出土の二重銜先環を有する轡については、二重銜先環と、轡とは別に破断した状況で出土している鉸具の分析を通じて、鉸具造立聞と二重銜先環を有する、有機質鑣の鑣轡に復原した。

鑣轡は６世紀以降数量が減少する中で、その１例として今回、新たな事例を加えることができたことが最大の成果である。今後は、実用的馬具とされるものでは円環轡が主流である中で、少量といえども鑣轡が生産された意味や、社会的価値を問う必要がある。

鑣轡を有する意味　日本列島出土の鑣轡は５世紀代に多く確認されているが、６世紀以降に位置づけられるものは 10 例ほどに過ぎない。その評価については稿を改めて行う予定である（大谷 2015）が、その十数例中４例が静岡県内の出土であり、さらにうち２例が東遠江の出土である。また、観音山古墳、観音塚古墳など 100 ｍ級の前方後円墳からの出土もあれば、篠ヶ谷 SA ８号墓のように横穴墓群中の１基に過ぎないものまで確認できる。古墳や出土品に共通点は見出し難いが、馬具の出土数が多い群馬、長野、静岡に存在しており、興味深い。鑣轡の分析を行うことで古墳時代後期～終末期の馬具生産や馬具の流通を新たな視点でみることが可能となるかもしれない。

また、韓半島の統一新羅時代の鑣轡と比較すると－時期が異なるため、今後さらなる慎重な分析が必要であるが－、繰り返しになるが少ないながらも、韓半島とは異なる鉸具造立聞と二重銜先環を有する鑣轡という日本独自の鑣轡を創出し（註７）、６世紀から８世紀まで生産していたことを評価する必要がある。

鳥取県小畑古墳群との類似性～篠ヶ谷 SA ８号墓出土鑣轡に関連して（予察）～　鳥取県小畑古墳群は馬具の出土数が多い古墳群であるが、このうち３号墳から、二重銜先環を有する十字文透心葉形鏡板付轡と帯金具を鉸具にはめる帯金具付鉸具造立聞円環轡が出土している（図 9）。後者は、このほか管見では福島県南相馬市羽山１号横穴墓、埼玉県深谷市四十坂 10 号墳 151 号土坑（馬殉葬土坑）、静岡県菊川市西宮浦１号横穴墓、富士市船津Ｌ 62 号墳の４基のみの出土であり、合計５例しか出土していない馬具である。この西宮浦１号横穴墓は上述したように篠ヶ谷横穴墓群に近接する横穴墓である（図 2）。小畑３号墳のように同一古墳から出土したわけではないので断定できないが、近接する地域に二重銜先環を有する特殊な轡（註８）と、特殊な円環轡が出土しており、小畑３号墳の

被葬者と同様の馬具の入手経路が想定される。

鉸具造立聞をもつ鑣轡は、鉸具造立聞円環轡との関連が想定されている（大谷 1985）。一方で、帯金具付鉸具造立聞円環轡は鉸具造立聞そのものであることから、二重銜先環と、帯金具付鉸具造立聞円環轡が偶然かもしれないが同一古墳あるいは近接する古墳群で出土していることはー２事例でしかないがー、鉸具造立聞円環轡と鑣轡の関連性が高い、あるいは近しい工房で生産された可能性が高いことを追証していることにつながることにならないか。さらなる検討を加えて、古墳時代後期～終末期の鑣轡の意義について稿をなすことを約して筆をおきたい。

【謝辞】

小論を執筆するに当たり、篠ヶ谷横穴墓群・西宮浦１号横穴墓の金属製品の実測調査に際し、菊川市教育委員会　蔵本俊明氏に御高配いただいた。また、鈴木一有氏に韓国の資料についてご教示いただきました。さらに、文献収集などで川口武彦氏に、菊川市西宮浦１号墓の金属製品の実測調査及び資料提供で藤村　翔氏にご協力いただいた。明記して深謝いたします。

註

1　轡の各部分の連結について銜先環に引手・鏡板を組み合わせる方式を「銜介在型」とする。鏡板に銜先環・引手を組み合わせる方式を「鏡板介在型」、遊環に銜・引手・鏡板を組み合わせる方式を「遊環介在型」とする。

2　「固定式遊環」は、韓国では「二重外環」と呼ばれているが、筆者大谷が分類する「８字式」（二重銜先環Ｂ類）に該当する「二重外環」が紀元前１千年紀から存在することなどから､諫早直人氏は筆者大谷の言う「交差式」（二重銜先環Ａ類）を、８字形の二重銜先環である「二重外環」と区分し、「固定式遊環」と呼称するとしている（諫早 2010)。

3　出典については、表１の参考文献参照。

4　この轡は銜先環に８字形金具を取り付けているため８字形の遊環としたが、８字のくびれ部分に鏡板を嵌めているように観察できるため、二重銜先環の１種と判断できる可能性がある。

5　表１に掲載した韓国出土の轡のうち、報告書では錆に覆われたりして二重銜先環（「固定式遊環」）か判断できないものがあるが、諫早直人氏の観察所見により（諫早 2012)、二重銜先環Ａ類と判断した。

6　韓国の古墳の時期については、鈴木一有氏に御教授いただくとともに報告書を紹介していただいた。明記して深謝いたします。

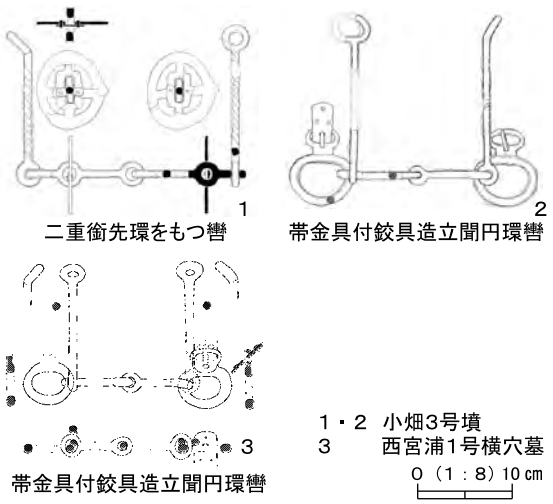


図９　二重銜先環をもつ轡と帯金具付鉸具造立聞円環轡

7　詳細は別稿（大谷 2015 予定）で述べるが、韓半島の三国時代に位置づけられる二重銜先環を有する鑣轡が百済・伽耶地域に存在する（諫早 2012）が、それらの鑣轡に鉸具造立聞が用いられたものは確認されていない（張 2003, 2008)。また、二重銜先環を有する統一新羅時代の鑣轡については、立聞は鉸具造のものはなく「板状掛留式」（張 2003）であり、引手も二条線引手あるいは円環引手とされるものである。これらは統一新羅独自の型式である（諫早 2012)。したがって、二重銜先環、鉄製鑣、鉸具造立聞など個々の要素が存在している韓半島南部で生産された可能性を 100％排除できないものの、鉸具造立聞で二重銜先環をもつ鑣轡は日本独自の型式の可能性が高い。

8　ただし、小畑３号墳の二重銜先環を有する轡は鑣轡ではないため、鑣轡の二重銜先環との関係は断言できない。今後の検討が必要である。

引用・参考文献

諫早直人　2010　「日本列島出土の轡の技術と系譜」『考古学研究』56 巻４号　考古学研究会

諫早直人　2012　「統一新羅時代の轡製作」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所

大谷　猛　1985　「日本出土の『鑣轡』について」『論集日本原史』　吉川弘文館

大谷宏治　2015　「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立聞鑣轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論集』（刊行予定）

片山寛明　1987　「日本の轡ー奈良時代～江戸時代」『馬の博物館研究紀要』１　根岸競馬記念公苑

片山寛明　1990　「和式轡の展開」『日本馬具大観』３　中世　日本中央競馬会

嘉穂町教育委員会　1981　『新行坊古墳』

川江秀孝　2010 「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」『静岡県考古学研究』41・42 合併号 静岡県考古学会
京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995 『京都府遺跡跡概報』62
群馬県古墳時代研究会　1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
権度希（武末純一訳） 2013 「百済地域馬具の編年」『日韓交渉の考古学－古墳時代』「日韓交渉の考古学－古墳時代－」研究会
斎藤　弘　1992 「馬具について」『観音塚古墳調査報告書』高崎市教育委員会
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008 『原分古墳』
鈴木一有　1999 「律令時代における轡の系譜」『下滝遺跡群２』 浜松市文化協会
鈴木敏則　2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第５分冊 東海土器研究会
高崎市教育委員会　1992 『観音塚古墳調査報告書』
東海古墳文化研究会　2006 『東海の馬具と飾大刀』
長野県　1988 『長野県史』考古資料編全１巻（４）遺構・遺物
張　允禎　2003 「韓半島三国時代の轡の地域色」『考古学研究』50 巻２号　考古学研究会
張　允禎　2008 『古代馬具からみた韓半島と日本』同成社
花谷　浩　1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会
宮代栄一　2013 「長野県出土の５～６世紀の馬具」『文化の十字路　信州』 日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会
明星大学考古学研究室　1983 『大淵ヶ谷　篠ヶ谷　西宮浦』
和田千吉　1917 「珍らしき轡」『考古学雑誌』７巻 11 号 考古学会

【表１文献】

１　福島県立博物館　2006 『馬と人の年代記』
２　狛江市史編纂委員会　1985 『狛江市史』 狛江市
３　山梨県　1999 『山梨県史』資料編２　原始・古代２
４　袋井市教育委員会　1999 『石ノ形古墳』
５　東海古墳文化研究会　2006 『東海の馬具と飾大刀』
６　鳥取市文化財団　2004 『倭文所在城跡・倭文古墳群』
７　九州前方後円墳研究会　1999 『九州における横穴式石室の導入と展開』
８　大刀洗町教育委員会　2009 『本郷野開遺跡Ⅴ・Ⅶ』
９　九州大学文学部考古学研究室　1993 『番塚古墳』
10　長野県　1992 『長野県史』資料編１（４）
11　飯田市教育委員会　2003 『北本城々跡　北本城古墳』
12　御所市教育委員会　2002 『巨勢山古墳群Ⅳ』
13　橿原考古学研究所　1988 『寺口忍海古墳群』 新庄町教育委員会・橿原考古学研究所
14　鳥取県教育文化財団　2002 『小畑古墳群』
15　片平雅俊　1998 「茨城県内出土古墳時代馬具集成 茨城県における古墳時代馬具の研究（１）」『十王町民俗資料館紀要』７ 十王町民俗資料館
16　群馬県古墳時代研究会　1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
17　群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ』
18　高崎市教育委員会　1992 『観音塚古墳調査報告書』
19　和田千吉　1917 「珍らしき轡」『考古学雑誌』７巻 11 号　考古学会
20　川江秀孝　2010 「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」『静岡県考古学研究』41・42 合併号 静岡県考古学会
21　大谷　猛　1985 「日本出土の『鑣轡』について」『論集日本原史』 吉川弘文館
22　川江秀孝　1992 「馬具」『静岡県史』資料編２ 考古２　静岡県
23　金子裕之　2005 「鳥羽八代神社の神宝２」『奈良文化財研究所紀要』2005
24　権度希　2013 「百済地域馬具の編年」『日韓交渉の考古学－古墳時代』「日韓交渉の考古学－古墳時代－」研究会
25　諫早直人　2012 「統一新羅時代の轡製作」『文化財論叢Ⅳ』 奈良文化財研究所
26　東亜大学校博物館　1970 『東萊福泉洞第１号古墳発掘調査報告』
27　光州博物館　1984 『海南月松里造山古墳』
28　啓明大学校博物館　1981 『高霊池山洞古墳群』
29　国立昌原文化財研究所　2002 『馬甲塚』

【図の出典】

図１　石ノ形古墳の轡実測図（表１文献より）に加筆。
図２　国土地理院発行「1:50,000 掛川」を複写して加筆。
図３　明星大学考古学研究室 1983 より。
図４　筆者実測・トレース。
図５・７　表１の文献より。
図６　１－宮代 2013 より、２－京都府埋文センター 1995 より
図８　群馬県観音塚古墳及び静岡県高根森８号墳出土鑣轡を参考に筆者作成。
図９　１・２　表１文献より、３　藤村　翔氏提供。

【論文】

静岡県の後期古墳における脚付長頸壺

田村隆太郎

要旨　筆者は長泉町原分古墳の発掘調査報告書において、諸研究の成果と静岡市賤機山古墳や奈良県藤ノ木古墳など首長墓の状況を参考にして、脚付長頸壺の器種選択とその特別な扱われ方について、首長層における儀礼の特徴を示すものと評価した。このことに関連して、本稿では静岡県内の後期古墳（横穴墓を含む）における脚付長頸壺の器種選択と出土状況について、階層や地域、時期による様相を確認した。その結果、階層性との関係が認められる一方、地域による様相の差異や変遷も認められることから、地域性などの影響も考慮されることを評価した。

キーワード：墓室内土器　脚付長頸壺　器種選択　出土状況　階層性　地域性　葬送儀礼

1　はじめに

筆者は、静岡県駿東郡長泉町の原分古墳の発掘調査報告書（静文研 2008a）において、調査成果の検討に加えていただき、当古墳の埋葬と儀礼について執筆させていただいた（田村 2008）。その中で、石室内の土器群の中で１個体のみ認められた脚付長頸壺に注目し、他の器種が転倒した状態であったのに対して、立て置かれた可能性もあることを指摘した（図 4）。そして、葬送儀礼において他器種と異なる特別な存在として用いられ、その役割や意識が儀礼後の移動や追葬に伴う片付けを経ても保持された可能性を評価した。

しかし、原分古墳の脚付長頸壺には出土位置と高さの記録しかなく、立て置かれたかは不明確である。先述の評価は、転倒状態の多くの土器に比べて高い場所で発見されたことから、立て置かれていた可能性を示し、さらに、奈良県牧野古墳（広陵町教委 1987）や藤ノ木古墳（奈良橿考研 1990・1995）の器台や脚付長頸壺、静岡市賤機山古墳（静岡県教委 1953）の脚付長頸壺が特異的に立て置かれていることを参考にしたものである。

この３基の古墳や原分古墳は、いずれも首長層または小首長層に位置づけできる横穴式石室の古墳であり、豊富な副葬品、家形石棺を伴う点でも共通する。このことから、脚付長頸壺の扱われ方について、首長層に共有された儀礼に対する意識が表現されている可能性も考慮される。ただし、賤機山古墳では脚付長頸壺２個が他器種とは別に石棺前方に並立するのに対して、その他の３基の脚付長頸壺は、石室の袖や側壁寄りの土器群の中に位置するという違いもある。各古墳で行われた儀礼には、階層的な序列だけではなく、時期や地域、被葬者または集団の様々な特性が強弱を含めて複雑に関わっていると推測される。

以上をふまえて、葬送儀礼の様相や意識を読み取るには極めて限定的であるが、脚付長頸壺の器種選択と出土状況（扱われ方）について、原分古墳や賤機山古墳が位置する静岡県内における様相を確認したい。

2　後期古墳の土器と儀礼をめぐる研究

対象資料をみる前に、後期古墳の土器による儀礼や葬送観念に関する諸研究、器種や出土位置について着目した諸研究の成果を概観する。

小林行雄氏は、石室内の土器に食物を調理して供する儀礼を示すものがあり、記紀の黄泉国におけるヨモツヘグイの記事との関連を指摘した（小林行 1949）。

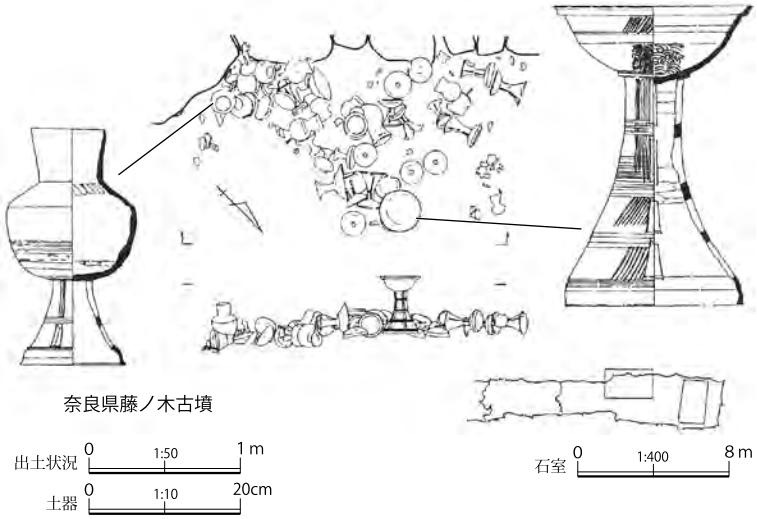


図１　立て置かれた器台と脚付長頸壺

さらに、白石太一郎氏は後期古墳の各所で出土する土器の儀礼的性格について言及し、閉塞に伴う土器をコトドワタシと関連する黄泉国からの呪的逃亡、死霊を封じ込める呪的儀礼によるものと位置づけた（白石 1975）。亀田博氏は、木棺直葬における土器のあり方も分析し、棺内の土器に対してヨモツヘグイとの関連を評価している（亀田 1977）。土生田純之氏は、石室内の土器をめぐる様相について、新たな観念に基づく葬送儀礼の成立によるものとし、さらに畿内型石室の成立や伝播との関連性を指摘して、畿内政権が関わる政治的背景による出来事と評価した（土生田 1998）。

その後、寺前直人氏は、ヨモツヘグイとの関連は一部の炊飯具形土器を伴う古墳・古墳群に限定されたものであり、大型古墳をはじめとする多くは、従来の饗宴・共飲共食儀礼の器種構成が維持されていることを指摘した（寺前 2006・2012）。森本徹氏は、石室内における土器の出土位置、とくに被葬者からの距離に注目し、多くは飲食儀礼に用いた土器を石室内に持ち込んだものであると推測している（森本 2007）。また、古屋紀之氏は、器種組成とともに正位か否かといった出土状態に着目し、藤ノ木古墳などについては食物供献儀礼に用いた土器を石室内に持ち込んだものと評価している（古屋 2011）。このように、石室内の土器群に対する評価と儀礼の様相について、多様な視点による分析と指摘が行われ、新たな観念（ヨモツヘグイ）の実態と歴史的意義について探求させられるものとなっている。

後期古墳の特に墓室内から出土する土器の器種は、多くの研究で着目されている要素である。白澤崇氏は、器種組成をＡ～Ｄ類に分類し、主に群集墳・横穴群における変遷や階層秩序との関連について分析している。その結果、多くの器種を伴う組成が上位階層に伴うことを指摘するほか、注ぐ機能を重視した瓹の存在が注目されるとし、壺や瓶類はその補完関係にあると評価している（白澤 1998a・1998b）。

藤原学氏は、長頸壺や器台、高坏などの長頸化や長脚化について、横穴式石室の導入と関連したものと評価している。さらに、賤機山古墳において指摘できる脚付長頸壺の特別な扱われ方について、石室内における新たな意識の表現として注目した（藤原 1985）。寺前直人氏は、乙訓地域の後期古墳出土土器の様相を分析し、脚付器種の有無が階層秩序と対応し、次いで瓹も同様の傾向にある可能性を指摘した。さらに、広域での格付けに基づいて階層に応じた脚付器種の選択がなされたと評価する一方、地域によって異なる特徴（須恵器の偏重など）もあり、地域ごとの分析と比較の必要性を示している（寺前 2005）。三原翔吾氏は、主に白澤氏や寺前氏の研究成果をふまえながら、若狭・越前地域の中・後期古墳出土土器について分析している。その結果、器台は階層との関係が強く、高坏や脚付壺はやや鈍いなどの傾向を把握したうえで、一定の階層秩序に応じた器種選択があったことを評価した。また、上位階層の儀礼が下位へ広がる変遷が認められることを指摘している（三原 2013）。

土器の出土位置についても、分析要素として認めることができる。小林孝秀氏は、上野地域の後期古墳における葬送儀礼について分析し、６世紀後半から７世紀初頭を移行期として、土器供献の場が石室内から前庭部に変化していることを明らかにした。さらに、首長墓における前庭部儀礼の変化と群集墳における埋葬空間確保に関連した石室内土器供献の省略という２つの動きとその連動を評価した（小林孝 2005）。柏木善治氏は、相模・南武蔵地域の横穴墓における様相を分析する中で、７世紀における玄室と墓前域における土器の器種組成等の変遷を把握している（柏木 2013）。

３　静岡県の脚付長頸壺出土後期古墳の諸例

脚付長頸壺の出土古墳（横穴墓を含む）とその出土状況について、静岡県内における状況を確認する。

地域は、図２のとおり区分する。時期（註１）は、脚付長頸壺が現われる時期（遠江Ⅱ期頃）から原分古墳の時期（遠江Ⅲ期末葉頃）までを対象とする。

なお、脚付長頸壺は遠江Ⅲ期末葉より後にも確認できるが、脚部は短小化して台状になり、また、３個体以上が出土する例（註２）が多くなるなど、扱われ方などにも大きな変化が予測される。さらに、横穴式石室や家形石棺の変容が認められる時期にもあたる（静岡県考古学会 2003）ことから、こうした終末期古墳における様相については、本稿とは別に評価することとしたい（註３）。

（１）伊豆・駿河

賤機山古墳と原分古墳（図３・４）　静岡市賤機山古墳は駿河の静清地域、長泉町原分古墳は駿河の駿東地域に位置する。

賤機山古墳は、遠江Ⅲ期中葉頃の直径約 32 ｍの円墳である。大型の両袖の横穴式石室に家形石棺を伴い、金銅装馬具や装飾付大刀などの副葬品もあることから、地域の首長墓として評価することができる。脚付長頸

壺は、玄室右袖（註４）付近に雑然と積まれた土器群とは別に、２個体が石棺前方に並立されていたと報告されている。

一方の原分古墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径約 17 m の円墳である。無袖の横穴式石室を埋葬施設とするが、大型の石室に家形石棺を伴い、金銅装馬具や装飾付大刀などの副葬品の特徴から、報告書では小首長層に位置づけられている。概ね３回の埋葬行為が復元でき、土器群も石室の奥寄り右隅、中央部、前寄り左側の３ヶ所に認められる。脚付長頸壺は、初葬に伴うと判断できる前寄り左側の土器群の最奥に位置する。先述のとおり出土状況は明確でないが、筆者は出土経緯などから立て置かれていた可能性を指摘した。

静清地域の諸例（図 3） 賤機山古墳のある静清地域では、このほかに静岡市駿河丸山古墳（静岡考古館 1962）と静岡市楠ヶ沢３号墳（静岡市教委 1986）から脚付長頸壺が出土している。また、静岡市神明山４号墳（清水市教委 2002）からも、脚付壺の出土が認められている。

駿河丸山古墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の一辺 20 m程の方墳である。家形石棺と箱形石棺を伴う両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀などの副葬品がある。楠ヶ沢３号墳は、遠江Ⅲ期後葉～末葉の一辺 15 m程の方墳である。撹乱が著しく副葬品などの様相は明確でないが、擬似両袖の横穴式石室に箱形石棺を伴うほか、鉄釘が出土している。神明山４号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径 18 m程の円墳である。擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀、挂甲などの副葬品をもつ。それぞれに異なる特徴を持つが、いずれも首長墓または上位階層として位置づけできる古墳である。

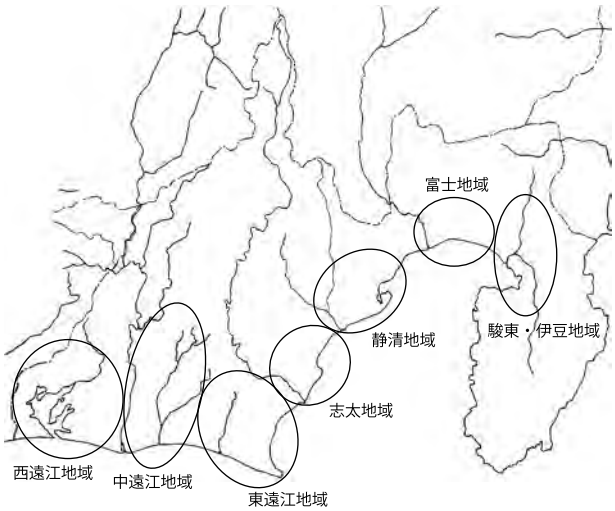


図２　対象資料の地域

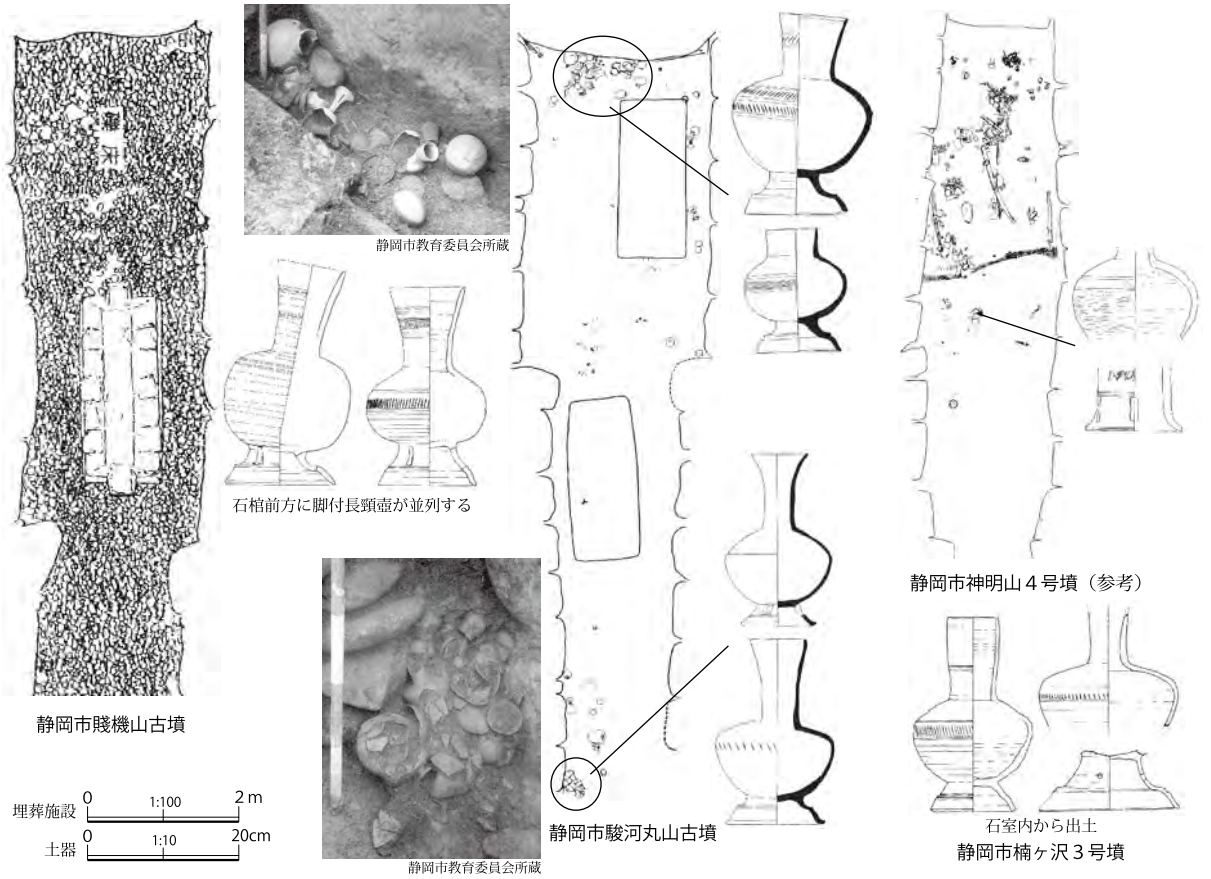


図３　賤機山古墳と静清地域の諸例

脚付長頸壺について、駿河丸山古墳では石室奥寄りの土器群に短頸のものを含めて２個体、追葬による可能性が指摘できる前寄りの土器群に２個体が認められる。しかし、いずれも土器群中にまぎれており、立て置かれた状況は認められない。神明山４号墳では、玄室中央付近で単独的に出土しているが、壊れた状態にある。楠ヶ沢３号墳は撹乱のために不明である。

なお、一辺 28 m程の方墳で鏡や馬具の副葬が認められる静岡市佐渡山２号墳（静岡市教委 1984）では、破片の状態であるが子持壺付の器台が認められる。

富士地域と駿東・伊豆地域の諸例（図 4）　駿河東半から伊豆にかけての諸地域では、原分古墳のほかに富士市谷津原６号墳（静文研 2001）、沼津市清水柳北３号墳（沼津市教委 1990）、三島市夏梅木９号墳（三島市教委 2000）に脚付長頸壺の出土が認められる。

谷津原６号墳は、富士地域最西域の富士川西岸に位置する。遠江Ⅲ期中葉頃の直径 17 m程の円墳であり、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。群集墳中の古墳であり、墳丘・石室規模や出土土器の器種組成からは比較的上位の階層にあるという評価はできるが、装飾

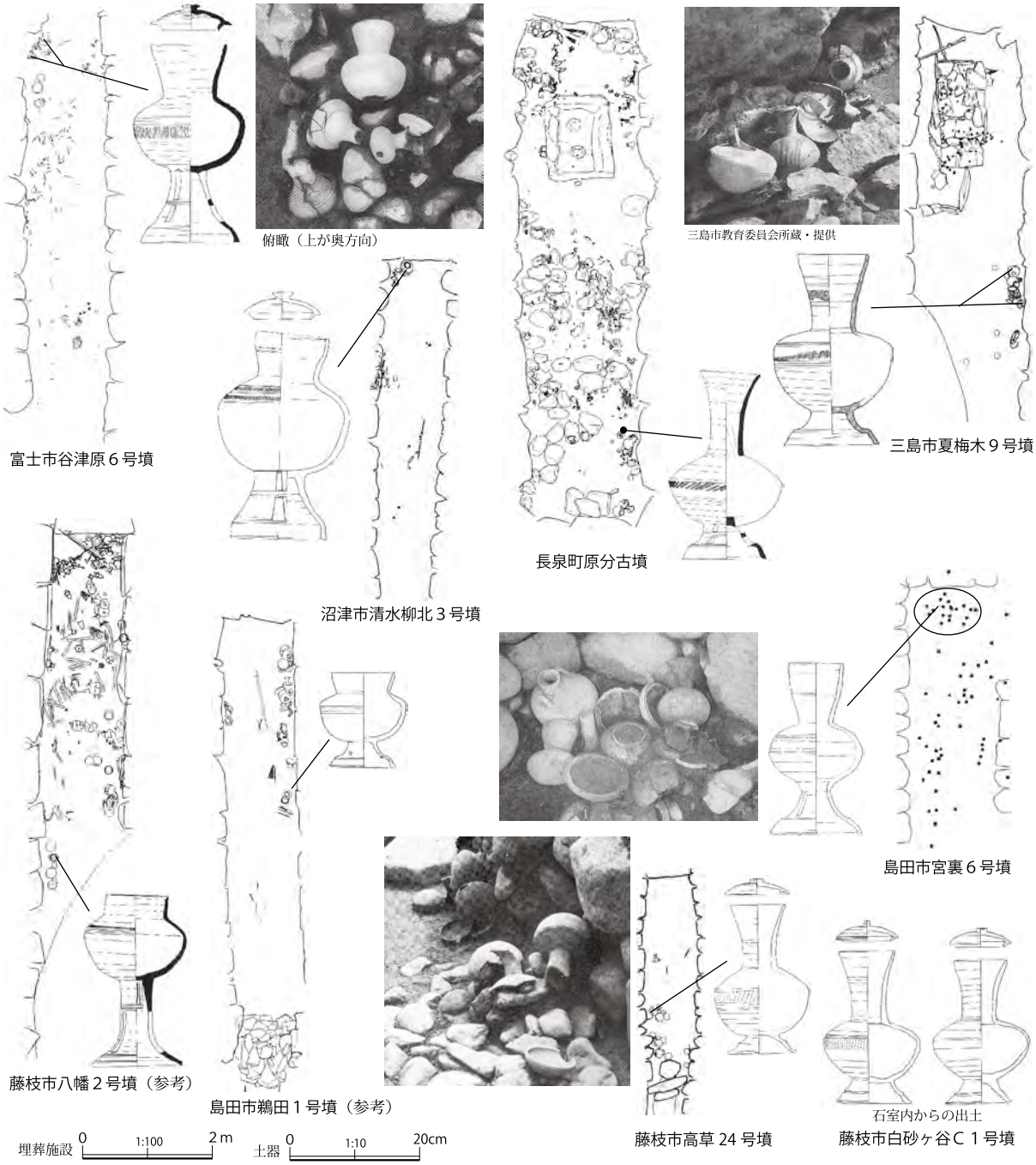


図４　原分古墳と富士地域および駿東・伊豆地域、志太地域の諸例

付大刀の出土は１号墳、馬具の出土は７号墳である。６号墳の脚付長頸壺は、石室奥寄りの土器群中にあり、脚付瑟とともに崩れた状態で出土している。しかし、石室の残存状況や他の遺物の出土状況から、後世に押し潰された可能性が推測され、本来は立て置かれていた可能性も推測できる。

駿東地域の清水柳北３号墳は、遠江Ⅲ期中葉頃の直径８ｍ程の円墳であり、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類に限られる。脚付長頸壺は、石室奥寄りにおいて単独で立て置かれた状態で出土している。

伊豆の夏梅木９号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径 11 ｍ程の円墳であり、箱形石棺を伴う無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。谷津原６号墳と同様に、比較的大きな墳丘・石室を伴うものの、副葬品は決して豊富とはいえず、群集墳中において比較的上位の階層にあるという評価に留まる。脚付長頸壺は、石室前寄り左側の土器群において、脚部と壺部分が別々に出土している。壺部分は土器群の最奥で正位に置かれているが、脚部は斜めになった状態である。また、壺の隣のフラスコ瓶も正位で出土していることから、特別目立つように置かれたという評価は難しい。

志太地域の諸例（図 4）　島田市宮裏６号墳（島田市教委 2010）や藤枝市高草 24 号墳（藤枝市教委他 1981）、白砂ヶ谷Ｃ１号墳（藤枝市教委他 1980）に脚付長頸壺の出土が認められる。いずれも群集墳の中に位置する。

宮裏６号墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の直径 12 ｍ程の円墳である。無袖の横穴式石室を埋葬施設とし、鉄製馬具などを副葬している。脚付長頸壺は、石室奥寄りの土器群の中にあり、横倒しにされた状態が認められる。

高草 24 号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径６ｍの円墳であり、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。副葬品は少ない。石室前寄りの土器群の中において、短い脚の長頸壺が倒れた状態で出土している。

白砂ヶ谷Ｃ１号墳は、遠江Ⅲ期末葉頃の直径 13 ｍ程の円墳である。擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とし、馬具などの副葬が認められる。石室内から短い脚の長頸壺が２個体出土しているが、詳細な状態については不明である。

なお、藤枝市八幡２号墳（藤枝市 2007）では、２段透かしの長脚をもつ短頸壺が認められ、石室前寄りで坏蓋や提瓶とともに並び、さらに土師器小型壺を入れた状態が確認されている。多くの土器や副葬品が出土しており、遠江Ⅲ期前～中葉の上位の階層に位置付けできる古墳である。また、島田市鵜田１号墳（島田市教委 1978）では、石室左側において転倒した高坏群とは別に、器高の低い脚付短頸壺が正位で出土している。無袖の横穴式石室を埋葬施設とし、遠江Ⅲ期前葉の横穴式石室導入期の事例となるが、土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類に限られる。

（２）遠江

東遠江地域の諸例（図 5）　遠江の東寄りの地域では、主に横穴群が展開しており、横穴式石室および木室の古墳は少数に限られる。

北西の内陸域（掛川市街地周辺）では、遠江Ⅱ期頃の掛川市山麓山横穴墓（掛川市 2000）、遠江Ⅲ期前葉頃の掛川市宇洞ヶ谷横穴墓（静岡県教委 1971）、遠江Ⅲ期中葉頃の掛川市堀ノ内 13 号墳（掛川市 1997・2000）、掛川市茶屋辻Ａ 13 号横穴墓（掛川市教委 2003）に脚付長頸壺の出土が認められる。前３基は墳丘や墓室の規模、金銅装馬具や装飾付大刀といった副葬品から首長墓に位置づけでき、茶屋辻Ａ 13 号横穴墓も横穴群の中では比較的上位の階層にあると評価できる。

山麓山横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓の脚付長頸壺については、出土状況の詳細は不明である。堀ノ内 13 号墳では、横穴式木室の奥寄りに土器群が認められ、出土状況図を見る限り、脚付長頸壺は倒れた状態であるが、大型の脚付瑟は立て置かれていたことが確認できる。茶屋辻Ａ 13 号横穴墓では、墓室中央付近で脚付長頸壺が横倒しになっている。

南東の海沿いの地域では、牧之原市稲荷山古墳（静岡県教委 1966）、牧之原市小堤山２号横穴墓（相良町教委 1999）、菊川市宇藤Ａ９号横穴墓（菊川町教委 1996）、掛川市毛森山欠下峠Ｂ１号横穴墓（大東町教委 2004）において、頸部のやや短い脚付壺が出土しており、前３基では横倒しの状態が確認できる。稲荷山古墳は数少ない横穴式石室の古墳ではあるが、直径 12 ｍ程の円墳であり、上位の階層として評価できる副葬品も認められない。その他の横穴墓についても、上位の階層に位置づけできる要素は認め難い。

なお、遠江Ⅲ期前～中葉頃の菊川市下本所 10 号横穴墓（静岡県教委 1968）からは、脚付短頸壺が出土している。横穴群の中では比較的多くの副葬品をもつが、際立った存在ではない。また、内陸域に位置する掛川市本村Ａ１号横穴墓（静岡県教委 1968）からは、長脚の脚付短頸壺が横倒しの状態で出土している。横

穴群の中で最も古い横穴墓であるが、規模は４号横穴墓が最大である。

中遠江地域の諸例（図６）　横穴群が展開する東遠江と群集墳が展開する西遠江との境界域にあたり、東西の傾向を伴った小地域が分布する。

東寄りの森町・袋井市域について、古墳では、遠江Ⅲ期前～中葉頃の袋井市山本山４号墳（袋井市教委 1978）、遠江Ⅲ期中葉頃の森町林５号墳（静文研 2008b）や袋井市北山２号墳（浅羽町教委 1987）、遠江Ⅲ期後葉頃の森町院内３号墳（森町 1998）や袋井市団子塚６号墳第１主体部（袋井市教委 1992）のほか、近年発掘調査された袋井市団子塚Ｈ１号墳第１・２主体部（袋井市教委 2013）に脚付長頸壺の出土が認められる。

これら出土古墳の階層的位置に関して、院内３号墳は装飾付大刀などを副葬する両袖の横穴式石室であるが、直径 10 ｍ程の円墳である。林５号墳は横穴式木室を埋葬施設とする直径 15 ｍ程の円墳であり、単独立地の古墳ではあるが、金銅装馬具や装飾付大刀の副葬はない。その他の古墳も、これらより上位の階層に評価できる要素はない。なお、遠江Ⅲ期前葉頃の横穴式石室導入期の古墳であり、規模や副葬品から首長墓に位置づけできる袋井市大門大塚古墳（袋井市教委 1987）からは、長脚の脚付短頸壺や器台が出土している。

脚付長頸壺について、山本山４号墳では石室奥寄り左側、林５号墳では墓室左前裾部、団子塚Ｈ１号墳第

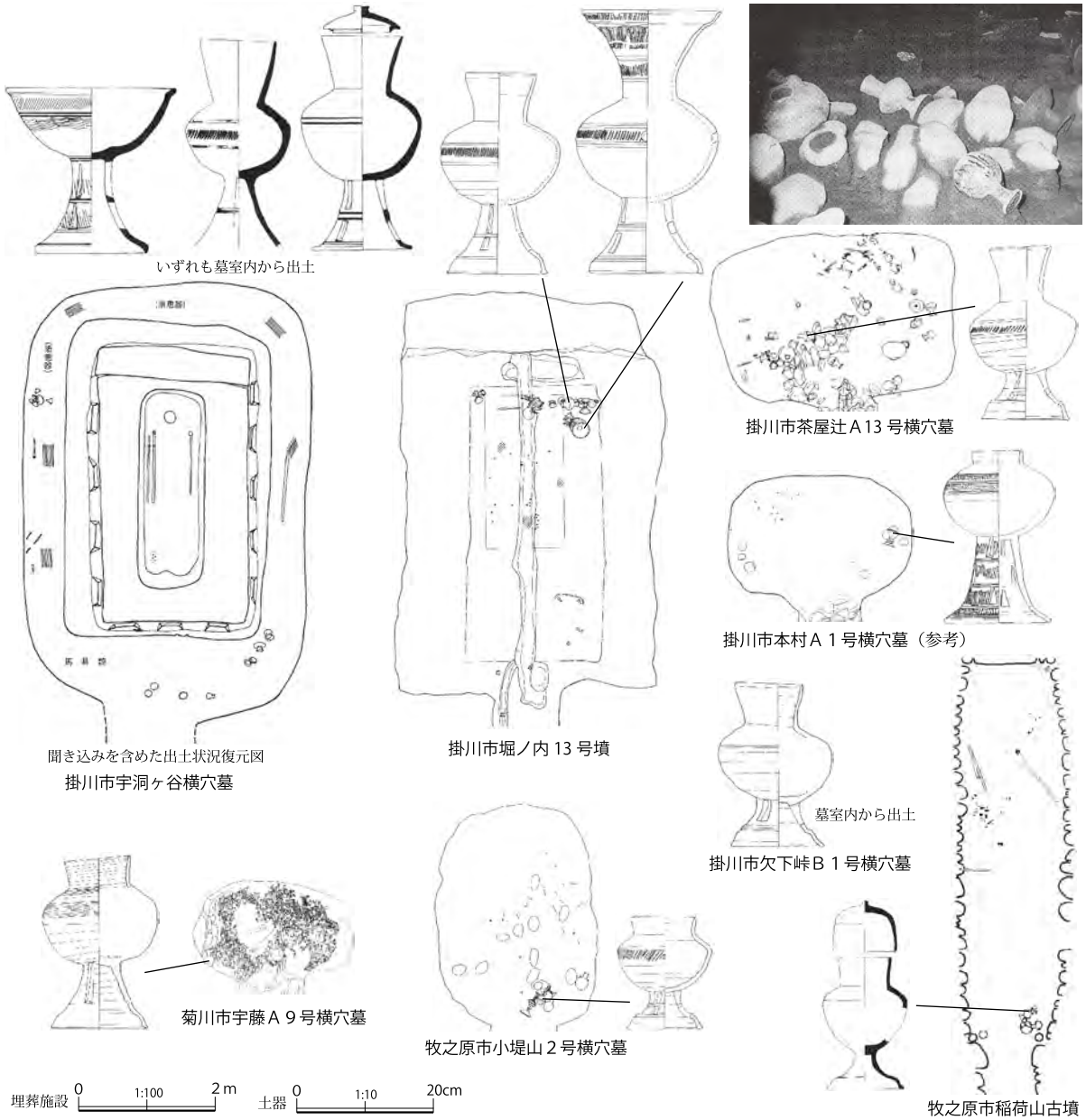


図５　東遠江地域の諸例

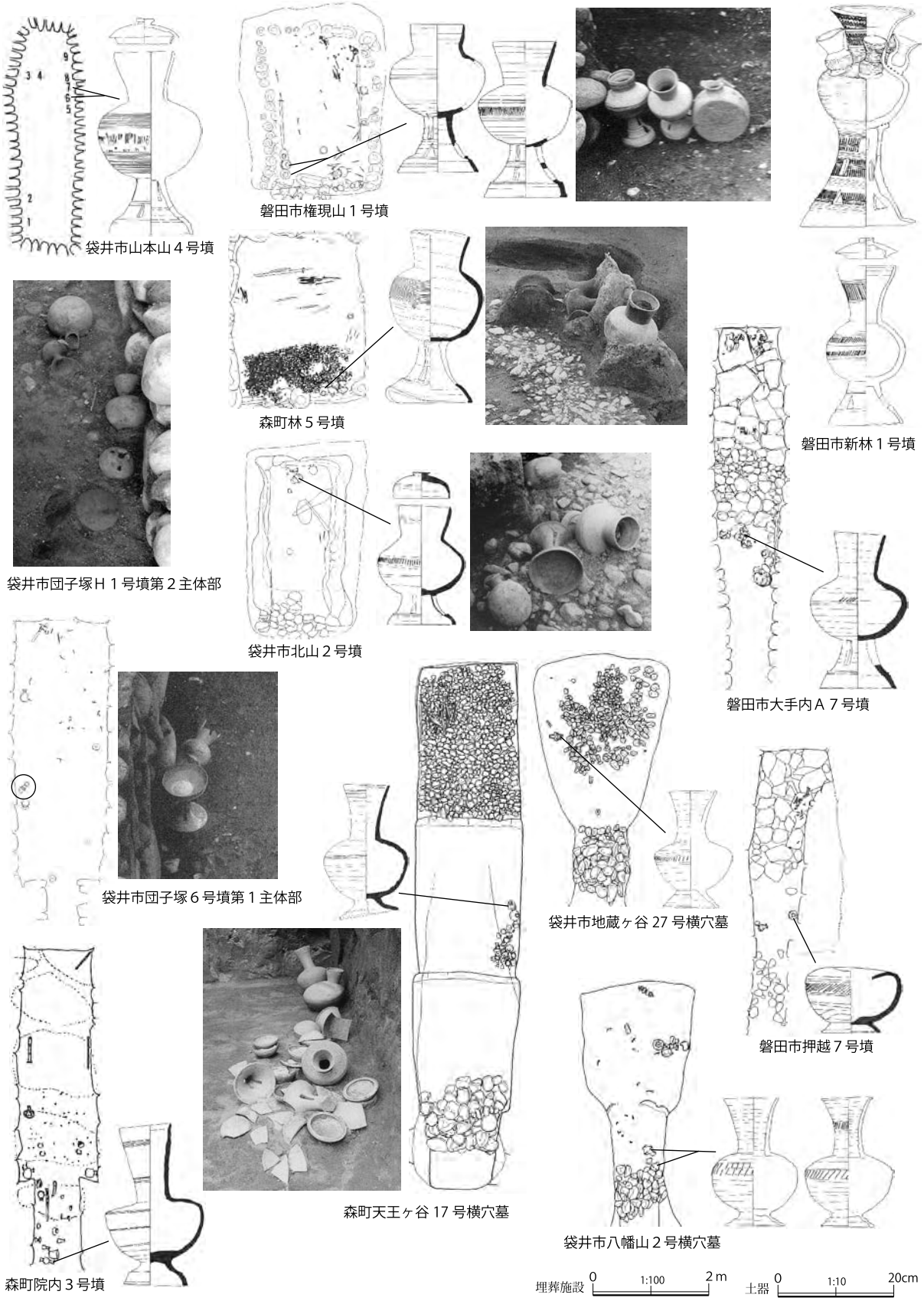

袋井市山本山４号墳
磐田市権現山１号墳
森町林５号墳
磐田市新林１号墳
袋井市団子塚Ｈ１号墳第２主体部
袋井市北山２号墳
磐田市大手内Ａ７号墳
袋井市団子塚６号墳第１主体部
袋井市地蔵ヶ谷 27 号横穴墓
磐田市押越７号墳
森町天王ヶ谷 17 号横穴墓
袋井市八幡山２号横穴墓
森町院内３号墳
埋葬施設 0 1:100 2 m
土器 0 1:10 20cm

図６　中遠江地域の諸例

２主体部では石室前寄り左側において、横倒し状態の多い土器群の中で立て置かれた状況が認められる。しかし、北山２号墳では墓室奥寄り、院内３号墳では羨道前寄り、団子塚６号墳第１主体部では石室右側において倒れた状態の出土状況が報告されている。なお、大門大塚古墳の器台等については、詳細な状態が把握できない。

横穴墓では、遠江Ⅲ期末葉以降の森町天王ヶ谷 17 号横穴墓（静岡県埋文 2012）、袋井市地蔵ヶ谷 27 号横穴墓（袋井市教委 2004）、袋井市八幡山２号横穴墓（袋井市教委 1997）に脚付長頸壺の出土が認められる。

天王ヶ谷 17 号横穴墓は、土器と鉄製武器の副葬に限られるが、横穴群の中では古い時期にあり、墓室規模が大きい。墓室前寄り左側の土器群の最奥に短い脚の長頸壺があり、平瓶や高坏とともに立て並べられている。他の２基は、横穴群の中でも決して上位の階層にあるとはいえない。いずれの脚付長頸壺も、単独的に横倒しの状態で出土している。

西寄りの磐田市域では、横穴墓がほとんど認められない。遠江Ⅱ期頃の甑塚古墳（磐田市 1992）、遠江Ⅲ期中葉頃の権現山１号墳（静岡県教委 2001）、遠江Ⅲ期後葉頃の新林１号墳（豊岡村 1993）、遠江Ⅲ期末葉以降の押越７号墳（豊岡村教委 1983）、大手内Ａ７号墳（豊岡村教委 2000）に脚付長頸壺の出土を認めることができる。

甑塚古墳は、直径 26 ｍの円墳である。畿内系石室の特徴をもつ片袖の横穴式石室を埋葬施設とし、金銅装馬具や装飾付大刀など非常に豊富な副葬品があることから、首長墓に位置づけできる。石室内の土器も多く、脚付長頸壺の他に大型の脚付短頸壺や器台が認められる（註５）。権現山１号墳は、墳長 18 ｍ程の前方後円墳である。横穴式木室を埋葬施設とし、金銅装馬具など比較的豊富な副葬品をもつ。２個体の脚付長頸壺と提瓶が墓室前寄り右側に立て並べられている。

その他の３基は、磐田市域の中でも北部に位置する。新林１号墳は、直径 15 ｍ程の円墳であり、片袖の横穴式石室を埋葬施設とするが、副葬品の全容は不明である。脚付長頸壺のほかに小型壺付きの大型脚付長頸壺も出土しているが、出土状況は不明である。押越７号墳と大手内Ａ７号墳は、群集墳中の円墳であり、土器以外の副葬品は鉄製武器と玉類等に限られる。押越７号墳では、短い脚の長頸壺が単独で石室前寄りに立て置かれている。大手内Ａ７号墳では、玄室前寄りに単独で脚付長頸壺が割れた状態で出土している。

なお、磐田市梵天 18 号墳（磐田市教委 2003）や磐田市寺谷坂上 23 号墳（磐田市教委 1989）では、周溝や墓道において脚付長頸壺が出土している。いずれも、遠江Ⅲ期末葉頃の群集墳中の古墳である。

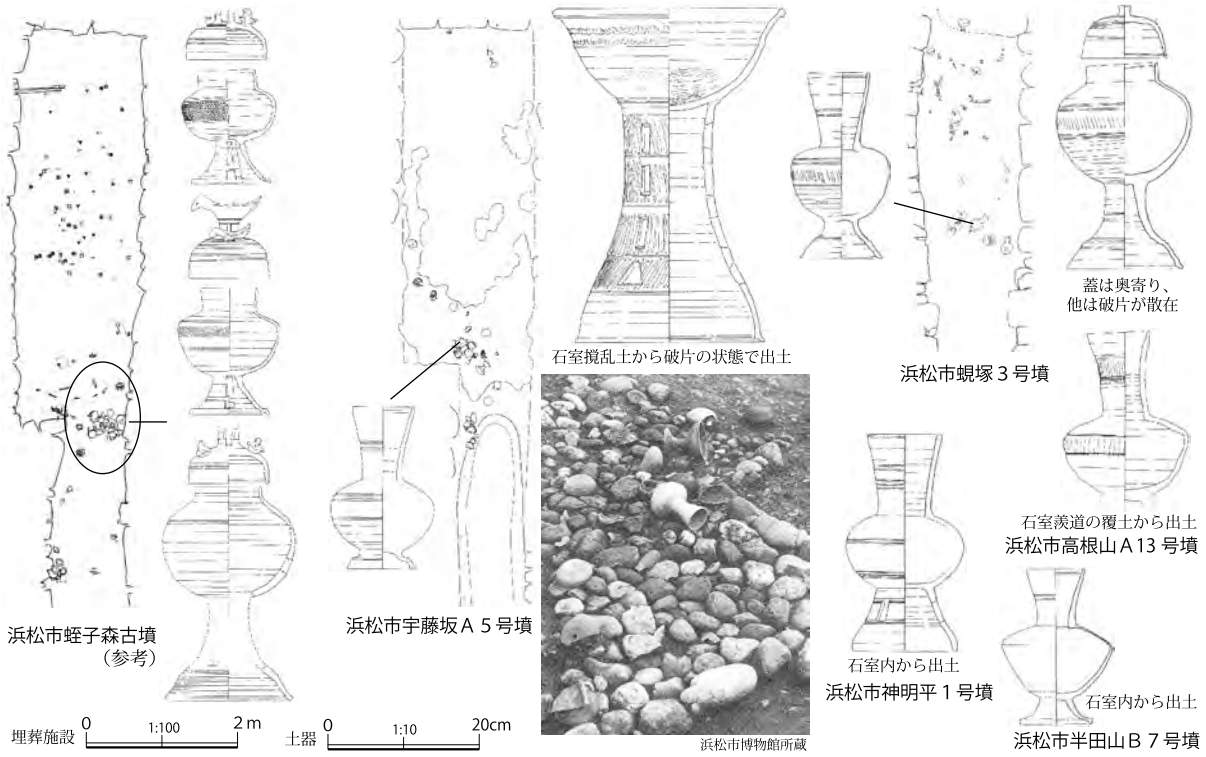


図７　西遠江地域の諸例

西遠江地域の諸例（図７）　横穴式石室および木室の古墳が多く分布する地域である。しかし、墓室内から脚付長頸壺が出土している古墳は、遠江Ⅲ期後葉頃の浜松市宇藤坂Ａ５号墳（浜松市文協 1998）、浜松市半田山Ｂ７号墳（浜松市教委 1971）、遠江Ⅲ期末葉頃の浜松市蜆塚３号墳（浜松市教委 1985）、浜松市神明平１号墳（川江 1997）、浜松市高根山Ａ 13 号墳（浜北市教委 1995）など、決して多くはない。一方、半田山古墳群や下滝古墳群、地蔵平古墳群などの群集墳において、周溝や前溝から脚付長頸壺などが出土する例が多く認められる（浜松市教委 1988、浜松市文協 1992・1997）。

宇藤坂Ａ５号墳は、直径 18 ｍ程の円墳であり、片袖の横穴式石室を埋葬施設とする。撹乱の影響もあって、武器・馬具などの副葬品は目立たないが、脚付長頸壺のほかに特殊扁壺や器台などを含む豊富な土器群が認められる。並列する４号墳からは金銅装馬具の副葬もあり、上位階層の系列として位置づけることもできる。脚付長頸壺は、玄門付近の土器群の中で横倒しの状態で出土している。器台は、撹乱土中からの破片の出土である。

蜆塚３号墳は、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。副葬品は武器類だけであるが、並列する１号墳からは金銅装馬具などの副葬品が出土しており、比較的上位の階層にある古墳群として評価することもできる。３号墳の脚付長頸壺は、玄室前寄りで横倒しの状態で出土している。また、脚付短頸壺が墓道を含めて散在した破片の状態で出土し、蓋が玄室奥寄りで出土している。

その他の３基については、脚付長頸壺の出土状況に関する詳細は不明である。半田山Ｂ７号墳は、直径 12 ｍ程の円墳であり、擬似両袖の横穴式石室を埋葬施設とする。土器以外の副葬品は鉄製武器、農工具と玉類に限られる。神明平１号墳は、直径 13 ｍ程の円墳であるが、片袖の横穴式石室を埋葬施設とし、装飾付大刀などを副葬品とする。高根山Ａ 13 号墳も片袖の横穴式石室を埋葬施設とする。ただし、副葬品の様相は不明である。

なお、単独的に立地する直径 20 ｍ超の円墳である浜松市蛭子森古墳（浜松市教委 1995）からは、水鳥付蓋を伴う脚付短頸壺が出土している。片袖の横穴式石室を伴い、馬具や武器などの副葬品も比較的豊富である。脚付短頸壺は、玄門付近の土器群中に混在した状態で出土している。

４　静岡県の後期古墳と脚付長頸壺をめぐる様相

静岡県内の脚付長頸壺が出土した後期古墳をあげてきたが、出土古墳の特徴も出土状況も多様であることがわかる。また、埋葬や儀礼の状況だけではなく、後世の撹乱や調査報告に関する資料的な問題も影響していることを考慮すると、その評価は一層難しい状況にあるといえる。

しかし、個別的に異なる状況であっても、古墳時代の葬送をめぐる行為の痕跡として、何らかの意識が反映されているものと考える。また、わずかでも傾向が見出せれば、その可能性を評価しておきたい。そこで、諸研究で検討・指摘されてきた出土古墳の階層的位置、そして賤機山古墳や原分古墳で注目した出土状況に関する傾向について確認する。

（１）出土古墳の階層的位置

器台（佐渡山２号墳､宇洞ヶ谷横穴墓､大門大塚古墳、甑塚古墳、宇藤坂 A5 号墳）や大型脚付瓿（堀ノ内 13 号墳）、さらに長脚の短頸壺（八幡２号墳、下本所 10 号横穴墓、蛭子森古墳）については、上位階層への傾向が比較的明確であり、既に諸研究（寺前 2005 など）で指摘されている階層秩序に対応した脚付器種の選択を評価することができる。

これに対して、脚付長頸壺についてみると、上位階層にある古墳が目立つものの、そのように評価できない古墳も認められることがわかる。しかし、次のように地域・小地域ごとにみると、単に器台などに比べて上位階層との関係性が弱いというだけではなく、地域ごとに異なる様相や変遷として階層性との関係を評価することができる。

静清地域では、賤機山古墳をはじめとして首長墓・小首長墓に出土がかたよっている。また、東遠江地域の北西内陸域（宇洞ヶ谷横穴墓など）や中遠江地域の南西域にあたる磐田市域南部（甑塚古墳・権現山１号墳）においても同様であり、器台などに続く存在として上位階層に用いられた可能性が指摘できる。

その一方で、富士地域、駿東・伊豆地域や中遠江地域の南東域にあたる袋井市域では、早い段階から群集墳にも脚付長頸壺が用いられている。対象資料がⅢ期後葉以降にかたよるが、志太地域や西遠江地域も同様の状況が認められる。もちろん、群集墳の中でも有力層に位置づけできる古墳も少なくないが、限定的とまでは評価できない。

さらに、横穴群が展開する東遠江地域の中において

も、海沿いの諸地域では内陸域とは全く異なる状況が指摘できる。また、富士地域の中央域（富士・愛鷹山南麓）では、階層に関わらず脚付長頸壺の出土が認められていない。これらの状況も考慮するならば、少なくとも有力層における脚付長頸壺の器種選択が広く踏襲されていたとは評価し難い。脚付長頸壺が上位階層に用いられるものであったかは、地域・小地域による差異を伴う状況であった可能性が指摘できる。

（２）脚付長頸壺の出土状況

脚付長頸壺の出土位置については、多くが墓室の前寄りからの出土であったが、一部に奥寄りからの出土も認められる。清水柳北３号墳、谷津原６号墳、駿河丸山古墳、宮裏６号墳、堀ノ内 13 号墳、山本山４号墳、北山２号墳が該当するが、地域的なかたよりは認められず、階層的位置との関係も評価し難い。あえて指摘するならば、遠江Ⅲ期後葉以前に認められるという状況にある。ただし、多くの場合は他器種を含む土器群の中に脚付長頸壺があることから、脚付長頸壺に特化した傾向ではなく、土器群全般の配置や片付けの方法に起因するものと評価される。また、西遠江地域や中遠江地域の磐田市域では、遠江Ⅲ期後葉以降を中心として墓室外からの出土が多く認められるが、このことについても、土器群全般の配置や片付け、または後世の影響における傾向である可能性が考慮される。

脚付長頸壺の出土状態（扱われ方）については、撹乱されたり割れ潰れたりしているものもあり、また、後世になってから倒れるなどの可能性も考慮しなければいけない。しかし、立て置かれた事例が一定数認められ、その一方で、横倒しにされた可能性が評価できる事例（駿河丸山古墳、宮浦６号墳など）もある。

遠江Ⅲ期中葉以前には立て置かれた事例（清水柳北３号墳、賤機山古墳、山本山４号墳、林５号墳、権現山１号墳など）が比較的多く、その後は横倒しの状態が多くなるという傾向が認められる。ただし、東遠江地域では古い段階から立て置かれた状態を認めることができず、その一方で、中遠江地域では新しい時期にも立て置かれた事例（天王ヶ谷 17 号横穴墓、押越７号墳）が認められる。さらに、立て置かれた事例の中においても、出土位置やその他の土器との位置関係などを含めると、全てが同様であるとはいえない。例えば、賤機山古墳のように単独で石室前方に立て置く方法については、広く踏襲されていたとは評価し難く、むしろ特徴的ともいえる。

このように、脚付長頸壺の扱われ方に関しては、立て置かれる傾向から他器種と同様に倒されるようになるという変遷の可能性が評価できるとともに、地域による変遷の差異や個別的な変異の可能性も指摘できる。原分古墳について再考すると、時期的な傾向をみれば、脚付長頸壺が横倒しであった可能性も考慮される。しかし、地域的な変遷の差異とともに、金銅装馬具に代表される豊富な副葬品に加えて家形石棺をもつという数少ない階層的位置にあることから、その特性によって脚付長頸壺を立て置く方法が採られた可能性も否定できないと考える。

５　まとめ

先に筆者は、原分古墳における脚付長頸壺の存在について、畿内を中心とした新たな墓制（横穴式石室）の出現と関係するように現われる器種であり、脚付器種が階層秩序に対応して選択される傾向にあるという諸研究の成果を参考にし、さらに、賤機山古墳や藤ノ木古墳、牧野古墳における立て置かれた出土状況に特別な扱われ方の可能性を評価し、これらを古墳時代後期の首長墓における葬送儀礼の特徴を示すものとして位置づけた（田村 2008）。

しかし、静岡県内における脚付長頸壺の状況をみると、より広い階層に展開する様相が確認できる。たしかに、脚付長頸壺が上位階層にかたよって選択される傾向は認められ、また、特別に立て置く方法が採られる場合も少なからずあることは指摘できる。しかし、いずれも地域などによって差異があり、地域性や変遷、各古墳の特性が影響していることも考慮される。したがって、賤機山古墳などの特別な脚付長頸壺の扱われ方については、地域をこえた首長層における比較によって位置づけることが有効であると考えるが、単なる階層的な上下だけではなく、それぞれの地域性や個々の特性を考慮した検討が求められる。

本稿で評価した地域性については、後期古墳の儀礼に関する地域性ということになるが、その具体的な理解が検討課題となる。後・終末期古墳に関する地域性については、静岡県内でも既に横穴式石室や横穴墓に関する分析（静岡県考古学会 2001･2003）があり、また、須恵器生産における地域差とも関連する可能性が考慮される。さらに、儀礼に伴う土器群の中には、新出的で階層性との関連が強いと評価できる脚付器種だけではなく、多様な器種がある。伝統的な要素、階層に関わらない意識などが比較的強く表現されたものがあれば、それらを含めた検討は重要であると考える。

註

1　本稿では、遠江須恵器編年（鈴木 2004）によって時期を示すこととする。遠江Ⅱ期は陶邑編年 MT15 型式併行期（6 世紀前葉頃）、遠江Ⅲ期前葉は陶邑編年 TK10 型式併行期（6 世紀中葉頃）、遠江Ⅲ期中葉は陶邑編年 TK43 型式併行期（6 世紀後葉頃）、遠江Ⅲ期後葉は陶邑編年 TK209 型式併行期・飛鳥編年Ⅰ期の古相（6 世紀末葉～7 世紀初頭頃）、遠江Ⅲ期末葉は陶邑編年 TK209 型式併行期・飛鳥編年Ⅰ期の新相（7 世紀前葉頃）に概ねあたるものとする。

2　藤枝市白砂ヶ谷 D10 号墳（藤枝市教委他 1980）、森町円明寺 3 号墳（森町 1998）、袋井市地蔵ヶ谷 22 号横穴墓（袋井市教委 2004）など、墓室から 3 個体以上の脚付長頸壺が出土する終末期の古墳を散見することができる。

3　本稿では、対象古墳を総じて後期古墳と称しているが、正確には古墳時代後期から終末期に至るまでの範囲を対象としている。これは、本文にあるとおり、当該地域における古墳の変遷から対象時期を設定したうえで、後期古墳の様相を主体に検討することとしたためである。

4　横穴系埋葬施設の方向について、横口側を前、反対側を奥とし、左右は奥から前を向いたときの方向とする。

5　磐田市教育委員会主催の平成 24 年度文化財課企画展「黄泉の世界 - 磐田の後期古墳」において、出土土器が石室模型内に配置された状態で展示された。それによれば、器台は石室左側の埴輪棺の前方、脚付短頸壺は石室右側の土器群の中央、脚付長頸壺は同じ土器群の奥寄りに位置する。

引用・参考文献

浅羽町教育委員会　1987 『北山遺跡』

磐田市　1992 『磐田市史』史料編 1 考古・古代・中世

磐田市教育委員会　1989 『昭和 63 年度坂上遺跡・藤上原 3 遺跡発掘調査報告書』

2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

掛川市　1997 『掛川市史』上巻

2000 『掛川市史』資料編古代・中世

掛川市教育委員会　2003 『東名掛川 I･C 周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』

柏木善治　2013 「古墳時代後・終末期の喪葬観念 - 相模・南武蔵地域における横穴墓の様相を中心として - 」『考古学研究』第 60 巻第 1 号　考古学研究会

亀田　博　1977 「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第 23 巻第 4 号　考古学研究会

川江秀孝　1997 「神明平 1 号墳発掘調査報告」『浜松市博物館館報Ⅸ』

菊川町教育委員会　1996 『宇藤遺跡群』

広陵町教育委員会　1987 『史跡牧野古墳』

小林孝秀　2005 「上野における横穴式石室葬送儀礼の変化 - 群集墳の事例を中心として - 」『古文化談叢』第 52 集　九州古文化研究会

小林行雄　1949 「黄泉戸喫」『考古学集刊』第 2 冊　東京考古学会

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

2001 『富士川 SA 関連遺跡』

2008a『原分古墳』

2008b『森町円田丘陵の古墳群』

財団法人浜松市文化協会

1992 『有玉土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　下巻』

1997 『下滝遺跡群』

1998 『宇藤坂古墳群』

相良町教育委員会　1999 『小堤山横穴群』

静岡県教育委員会

1953 『静岡賤機山古墳』

1966 『静岡県埋蔵文化財要覧Ⅰ』

1968 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

1971 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』

2001 『静岡県の前方後円墳 - 個別報告編 - 』

静岡県考古学会　2001 『東海の横穴墓』

2003 『静岡県の横穴式石室』

静岡県埋蔵文化財センター　2012 『森町円田丘陵の横穴墓群』

静岡考古館　1962 『駿河丸山古墳』

静岡市教育委員会　1984 『佐渡山 2 号墳発掘調査報告書』

1986 『駿河　楠ヶ沢古墳群』

島田市教育委員会　1978 『鵜田 1 号墳・2 号墳　法信寺 1 号墳』

2010 『市内遺跡発掘調査報告書』

清水市教育委員会　2002 『神明山第 4 号墳発掘調査報告書』

白石太一郎　1975　「ことどわたし考 - 横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって - 」『橿原考古学研究所論集』創立 35 周年記念　吉川弘文館
白澤　崇
1998a　「組成からみた古墳主体部の副葬土器 - 静岡県三重県の事例を中心に - 」『網干善教先生古希記念　考古学論集』上　網干善教先生古希記念論文集刊行会
1998b　「組成からみた古墳主体部の副葬土器 - ２」『静岡県　考古学研究』No.30　静岡県考古学会
鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育委員会
大東町教育委員会　2004　『毛森山横穴群発掘調査報告書』
田村隆太郎　2008　「原分古墳における埋葬と儀礼」『原分古墳』調査報告編　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
寺前直人
2005　「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団
2006　「ヨモツヘグイ再考 - 古墳における飲食と調理の表象としての土器 - 」『待兼山論叢』第 40 号史学編　大阪大学大学院文学研究科
2012　「横穴式石室導入前後の古墳における土器組成」『駒沢史学』77 号　駒沢史学会
豊岡村　1993　『豊岡村史』資料編三考古・民俗
豊岡村教育委員会　1983　『押越・社山古墳群調査報告書』
2000　『大手内古墳群』
奈良県立橿原考古学研究所
1990　『斑鳩藤ノ木古墳　第一次調査報告書』
1995　『斑鳩藤ノ木古墳　第二・三次調査報告書』
沼津市教育委員会　1990　『清水柳北遺跡発掘調査報告書』
浜北市教育委員会　1995　『浜北市高根山古墳群』
浜松市教育委員会
1971　『浜松市半田山古墳群（Ｂ群）調査記録Ⅱ』
1985　『蜆塚遺跡Ⅴ・Ⅵ』
1988　『半田山古墳群（Ⅳ中支群 - 浜松医科大学内 - ）』
1995　『浜松市指定文化財 - 古墳 - 』
土生田純之　1998　『黄泉国の成立』 学生社
袋井市教育委員会
1978　『山本山古墳群』
1987　『大門大塚古墳』
1992　『団子塚古墳群 - 遺構編 - 』
1997　『八幡山横穴群』
2004　『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ』
2013　『団子塚古墳群Ｈ - １号墳発掘調査概報』
藤枝市　2007　『藤枝市史』資料編１　考古
藤枝市教育委員会他　1980　『原古墳群白砂ヶ谷支群』
1981　『原古墳群谷稲葉支群高草地区』
藤原　学　1985　「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾　末永先生米寿記念会
古屋紀之　2011　「土器と土製品の古墳祭祀」『古墳時代の研究』３墳墓構造と葬送祭祀　同成社
前田　健　2007　「古墳出土須恵器からみた須恵器の使用者と生産者 - 静岡平野の事例分析から - 」『静岡県考古学研究』No.39　静岡県考古学会
三島市教育委員会　2000　『夏梅木遺跡群』
三原翔吾　2013　「若狭・越前地域における古墳出土須恵器」『駒沢考古』第 38 号　駒沢大学考古学研究室
森町　1998　『森町史』資料編一考古
森本　徹　2007　「横穴式石室と葬送儀礼」『研究集会　近畿の横穴式石室』 横穴式石室研究会

図・写真出典

図１　藤ノ木（奈良橿考研 1990・1995）
図３　賤機山（静岡県考古学会 2003、前田 2007）、駿河丸山（静岡考古館 1962）、神明山４号（清水市教委 2002）、楠ヶ沢３号（静岡市教委 1986）
図４　夏梅木９号（三島市教委 2000）、原分（静文研 2008a）、清水柳北３号（沼津市教委 1990）、谷津原６号（静文研 2001）、八幡２号（藤枝市 2007）、鵜田１号（島田市教委 1978）、宮裏６号（島田市教委 2010）、高草 24 号（藤枝市教委 1981）、白砂ヶ谷Ｃ１号（藤枝市教委 1980）
図５　宇洞ヶ谷（静岡県教委 1971）、堀ノ内 13 号（掛川市 1997・2000）、茶屋辻Ａ 13 号（掛川市教委 2003）、本村Ａ１号（静岡県教委 1968）、欠下峠Ｂ１号（大東町教委 2004）、宇藤Ａ９号（菊川町教委 1996）、小堤山２号（相良町教委 1999）、稲荷山（静岡県教委 1966）
図６　山本山４号（袋井市教委 1978）、団子塚Ｈ１号（袋井市教委 2013）、団子塚６号（袋井市教委 1992）、北山２号（浅羽町教委 1987）、地蔵ヶ谷 27 号（袋井市教委 2004）、八幡山２号（袋井市教委 1997）、院内３号（森町 1998）、林５号（静文研 2008b）、天王ヶ谷 17 号（静岡県埋文 2012）、権現山１号（静岡県教委 2001）、新林１号（豊岡村 1993）、大手内Ａ７号（豊岡村教委 2000）、押越（豊岡村教委 1983）
図７　蛭子森（浜松市教委 1995）、宇藤坂（浜松市文協 1998）、蜆塚３号（浜松市教委 1985）、高根山Ａ 13 号（浜北市教委 1995）、神明平１号（川江 1997）、半田山Ｂ７号（浜松市教委 1971）

【研究ノート】

古代の水滴に関する一試論

丸杉　俊一郎

要旨　硯で墨を磨るためには、水を蓄え少量の滴を落とす水滴が不可欠である。しかし、文書作成行為において水滴は重要な役割をもつにもかかわらず、形態など考古資料から触れる機会はすくなかったといえる。本稿では、その機能が論じられることが多い須恵器・平瓶の諸属性を分析し、水滴の史的意義について検討した。その結果、頸部が短く体部に稜線を有し頂部に把手を付す小型の平瓶は、古代東海道西部では遠江国西部の官衙遺跡から主に出土している。また、この小型の平瓶が出土した遺跡では獣脚硯・無脚硯などの特殊硯や硯面の低い定形硯を保有しており、圏足円面硯を主体に陶硯が構成される遺跡では小型の平瓶は出土しないことを指摘した。これらの様相から、8 世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い小型の平瓶は水滴としての機能を確立させ、文書行政における権威を象徴する行為の主要な器種であったと評価した。

キーワード：平瓶、陶硯、特殊硯、官衙、文書作成、文房具

1　はじめに

古代の主要な文房具は、紙・筆・墨・硯で構成されている。この他にも、木簡・刀子・砥石・文鎮・印・机なども含めてよいであろう。そのなかでも考古資料として出土量が多いのは陶硯であり、これまで多くの論考により様々な角度から膨大な成果が得られ、研究が蓄積されてきた。

硯は当然のことながら、第一義的に墨を磨るための道具である。その際、必要不可欠なのは硯に注ぐ水であり、その水を蓄えておくために用途が特化された容器が水滴である。水滴は『和名類聚抄』に「水滴器　御覧寺目録云　水滴器　今案和名須美数理賀米」とあって、「すみすりかめ」と呼ばれていた。このように文書作成行為において水滴は重要な役割をもつにもかかわらず、その形態など水滴の具体像について考古資料から触れる機会はすくなかったといえる。

本稿では陶硯と密接な関連を有する水滴を、その機能が論じられることが多い平瓶の諸属性から検証し、古代社会における文字関連資料、特に文房具類の史的意義について迫りたい。

なお、本稿では須恵器の平瓶を対象とし、古代東海道諸国の伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆（以下、古代東海道西部）を対象範囲として論を進めていく。

2　古代東海道西部の小型平瓶

水滴は硯で墨を磨るために水を蓄え，少量の滴を落とすために使用される容器と捉えられ、その用途から必然的に小型であることが要求されよう。ここでは小型の平瓶の諸属性について触れておきたい。

平瓶の規模　まずは平瓶の法量を検討するために、図 1 に 7 世紀中葉～ 9 世紀中葉頃の古代東海道西部における窯業遺跡での平瓶を、体部最大径を法量の基準として計測・図示した。

その結果、体部最大径 25 ㎝以上の平瓶が最も多く、12 ～ 14 ㎝台に小ピークがあることが読み取れる。したがって、前者を大型品・後者を中型品として位置付けることが可能であり、12 ㎝未満は小型品として認められるであろう。

小型平瓶の分類　図 2 に古代東海道西部における消費遺跡出土の小型の平瓶を図示した。管見により出土遺跡は実際には増加すると思われるが、現状では以下のとおり分類できる。

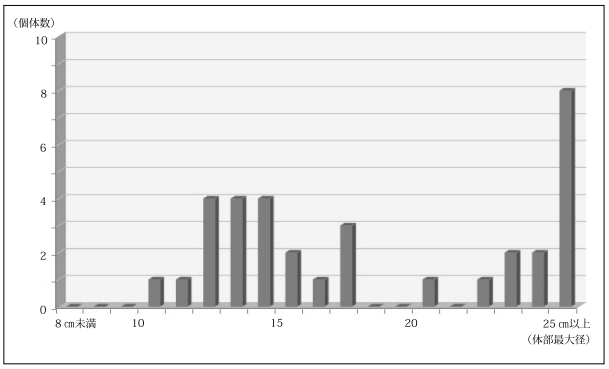
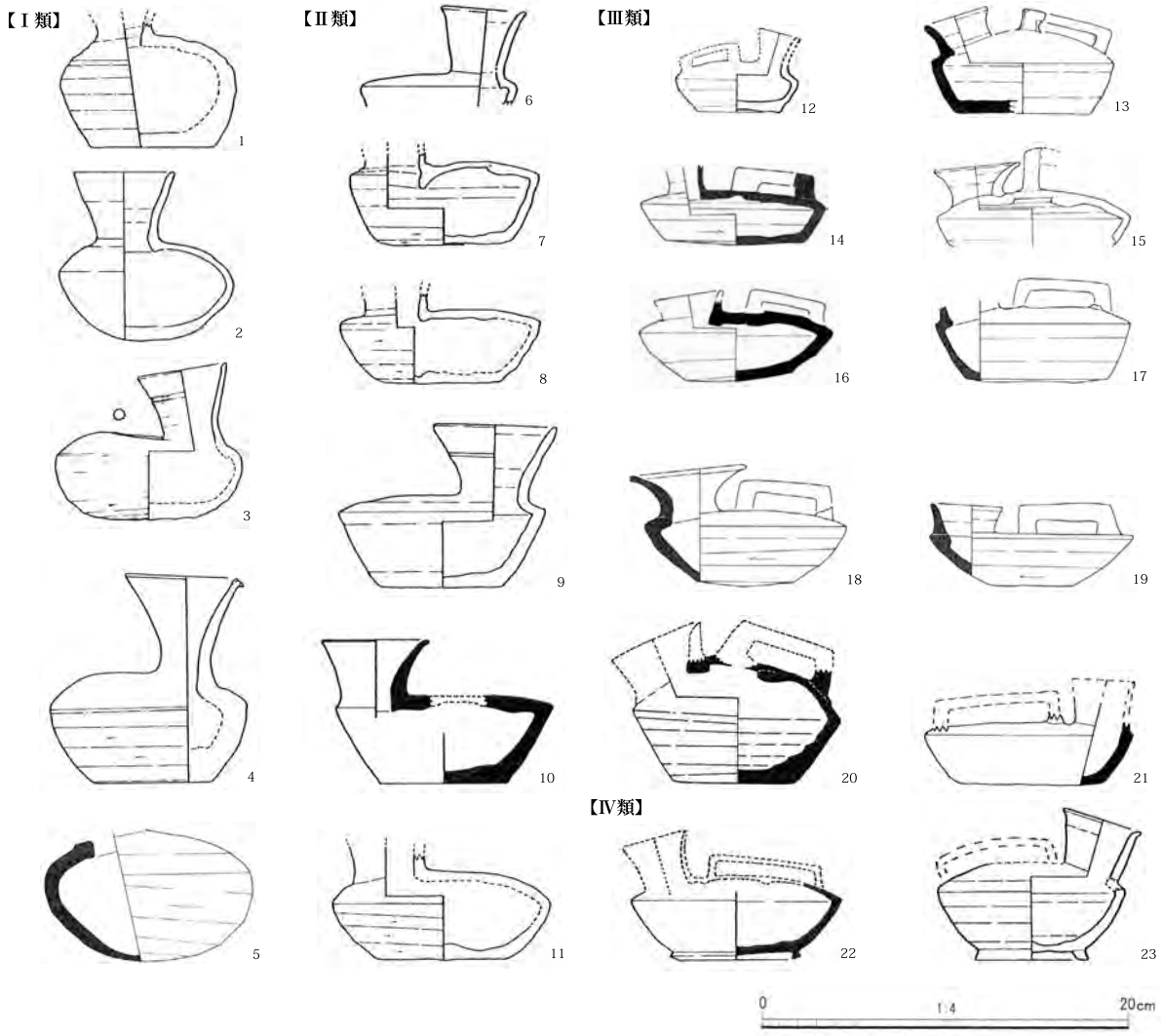


図 1　窯跡出土平瓶の法量



1：三重・覚正垣内　2：愛知・大渕　3：三重・居敷　4：三重・六大A　5・14・17～19：静岡・吉美中村　6：愛知・八王子　7：三重・川島遺跡群　8：三重・立花堂　9：三重・焼野　10・20・22：三重・斎宮跡　11：三重・城之越　12：静岡・城山　13：静岡・井通　15：静岡・天の川　16：静岡・宮竹野際　21：三重・杉垣内　23：愛知・寄名山

図２　小型平瓶の諸例

Ⅰ類　球形の体部に長い頸部をもつ。底部は丸底と平底がある。

Ⅱ類　体部に稜線を有し、長い頸部をもつ。底部は平底である。

Ⅲ類　体部に稜線を有し、頂部に把手を付す。頸部は短く、底部は平底である。

Ⅳ類　体部はⅢ類と同形態だが、頸部はやや長頸化する。底部に高台を付す。

これらは中・大型品の平瓶と同様、Ⅰ類からⅣ類へと変遷するとみてよいであろう。その年代もこれまでの須恵器研究から、Ⅰ類は７世紀後半頃・Ⅱ類は７世紀後葉～８世紀前葉頃・Ⅲ類は７世紀末葉～８世紀後葉頃・Ⅳ類は８世紀後葉～９世紀前半頃と概ね捉えられる。

陶硯との関連　ここでは７・８世紀代を主体とした陶硯との関連をみていこう。

Ⅰ類の小型平瓶が出土し陶硯を保有する遺跡には、愛知・大渕遺跡と三重・六大Ａ遺跡がある。大渕遺跡では外堤径 26 ㎝以上の大型の圏足円面硯が１点、六大Ａ遺跡では計６点の円面硯が出土している。六大Ａ遺跡では細部の爪まで表現された獣脚部付圏脚円面硯が出土しており、帰属時期は７世紀代を中心に８世紀前葉までの時間幅と捉えられている。

Ⅱ類では三重・斎宮跡のみに陶硯が確認されている。

Ⅲ類では静岡・城山遺跡、宮竹野際遺跡、井通遺跡と大型品を含めた圏足円面硯が多数出土している遺跡から出土が確認されている。宮竹野際遺跡では蹄脚硯や無脚硯、井通遺跡では蹄脚硯・獣脚硯・提瓶硯・形象硯などの陶硯が確認されている。斎宮跡でも蹄脚硯・圏足円面硯・形象硯を含む多様な陶硯が出土している。

静岡・吉美中村遺跡は窯業関連遺跡と評価されているが、多くの種類の陶硯とともにⅢ類の小型平瓶が出土していることは看過できない事象である。

Ⅳ類では愛知・寄名山遺跡より圏足円面硯が１点出土している（註1）。

３　小型平瓶の歴史的評価

小型平瓶の機能　小型平瓶は、奈良県・坂田寺において８世紀後半頃の金堂または講堂建立に際し、須弥壇鎮壇具としてⅢ類の小型平瓶が使用されたことが確認されており、水滴に機能が限定されたものではないことは明らかである。

古代東海道西部では、小型平瓶Ⅰ・Ⅱ類を伴う陶硯出土遺跡は極めて少ないことから、Ⅰ・Ⅱ類は水滴としての機能性が希薄であると考えられる。特に丸底で長い頸部のⅠ類は、その形態的特質から用途を水滴と断定することに躊躇せざるを得ない。

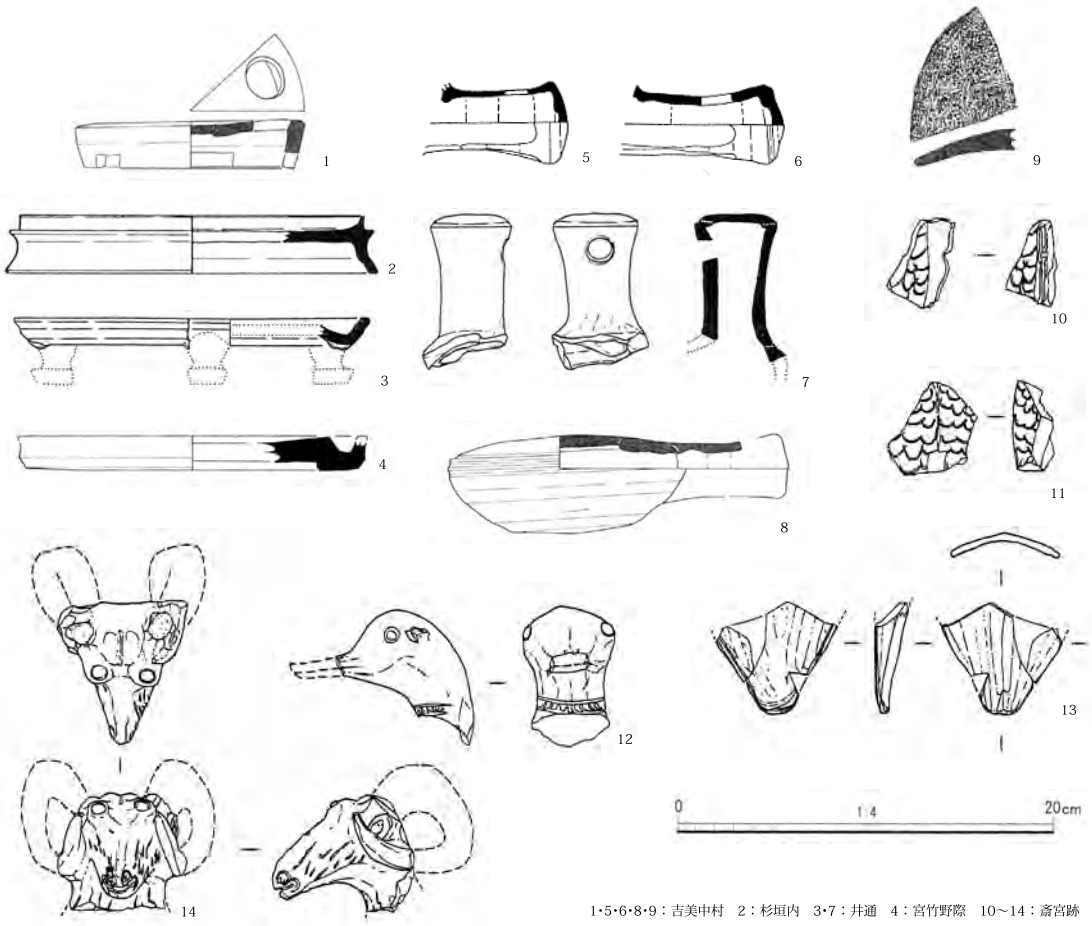
一方、小型平瓶Ⅲ類が出土した遺跡では必ず陶硯を保有しており、遺跡の性格でも斎宮跡や遠江国では出土が官衙遺跡に限定されている。また、それらの遺跡では多様な形態の陶硯が確認されており、これらを勘案すれば小型平瓶Ⅲ類が文書作成機能を有する施設における文字関連資料としての水滴であった可能性が高いと判断できる。

ただし、陶硯出土遺跡・点数に対する小型平瓶Ⅲ類の出土点数は大きな隔たりがある。その背景には、Ⅲ類を水滴として使用する地域は限られ、さらに水を注ぐ対象となる陶硯の種類も限定されていた可能性を指摘できる。

特殊硯と水滴　小型平瓶Ⅲ類は古代東海道西部のなかでも遠江国、特に天竜川以西の遠江国西部に分布が集中している。

また、遠江・駿河・伊豆国の陶硯を集成・検討した結果、圏足円面硯は３国全域で出土しているが、無脚硯・獣脚硯・提瓶硯・形象硯など特殊な陶硯は遠江国、特に天竜川以西の遠江国西部に分布の中心があることが判明している（丸杉 2008）。

この２つの状況は対応関係にあると推察され、さらに小型平瓶Ⅲ類が出土する遺跡では図３に示したように特殊硯を保有していることが確認できた。



1･5･6･8･9：吉美中村　2：杉垣内　3･7：井通　4：宮竹野際　10～14：斎宮跡

図３　小型平瓶出土遺跡の特殊硯

つまり、小型平瓶Ⅲ類は特殊硯に使用された水滴である蓋然性が高い可能性を指摘でき、圏足円面硯にはⅢ類を水滴として使用する機会は少ないものと考えることができる。

硯面の規模と水滴　こうした特殊硯は硯面が小さい、または低いものが多いが、そのような特徴は特殊硯に限らず圏足円面硯においても認められる。

遠江・駿河・伊豆国における蹄脚硯・圏足円面硯の外堤径・器高分布を示したのが図4である。これをみると外堤径は12㎝前後の小型品と16㎝前後の中型品に分類でき、器高は概ね7㎝前後に集中している。

しかし、外堤径を基準とした小型品・中型品では器高の分布幅が大きいことを読み解くことができる。このことを、器高は口径に比して低いものから高いものへと変遷するとの指摘もあるが（楢崎1982）、本稿では陶硯の変遷・年代観を検証できる資料を持ち合わせてはいない。

ここで注目されるのは、小型品・中型品の最も器高の低い一群を有する城山遺跡出土の陶硯類である。城山遺跡では圏足円面硯はみられるものの、特殊硯は確認されていない（註2）。城山遺跡での圏足円面硯は、外堤径が11㎝の小型品・15cm台の中型品はともに器高が5cm以下である。器高が5cm以下の陶硯は、吉美中村遺跡でも確認されており、いずれも小型平瓶Ⅲ類が出土している。

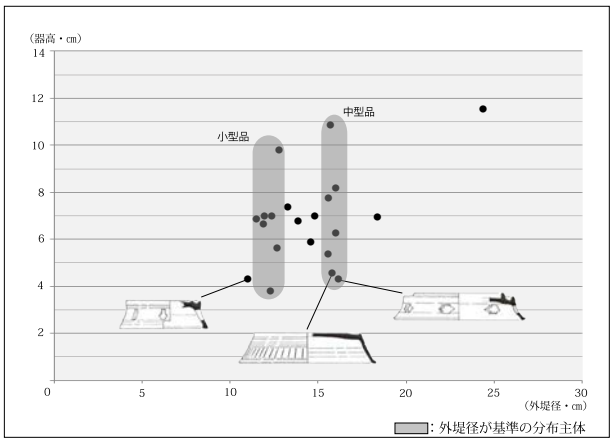


図4　円面硯の規模

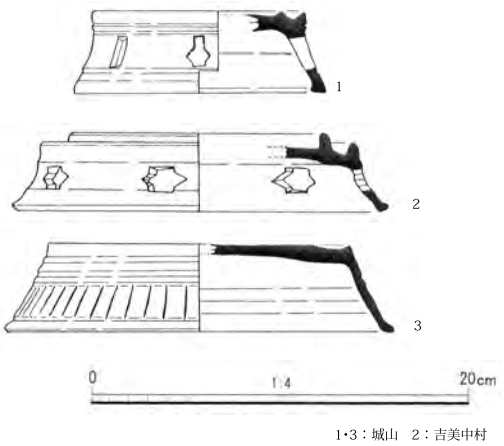


図5　器高の低い円面硯

一方、蹄脚硯や器高の高い圏足円面硯・外堤径が大きい大型の円面硯が出土する遺跡において、必ずⅢ類の小型平瓶が伴うものではない。

このように特殊硯に限らず器高の低い圏足円面硯が出土する遺跡からも小型平瓶Ⅲ類が確認されることは、水滴の対象陶硯は硯面が低い定形硯であることを示していると捉えることが出来よう。

水滴出土の要因　以上の検証で明らかにした考古学的な様相から、小型平瓶Ⅲ類が水滴として機能した意義について推察しておきたい。

小型平瓶はⅢ類段階になり形態・出土遺跡・陶硯保有状況から、水滴としての機能を備えたと捉えられる。その要因には、8世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い機能が確立したとみてよい。水滴の存在は必然的に硯と墨の存在を示すことになり、文書行政の実務における主要道具が具備されていたこととなる。

しかし、全ての陶硯類に小型平瓶Ⅲ類が水滴として使用された状況ではなく、特殊硯など硯面の低い定形硯を用途の対象としている。その背景は、硯で墨を磨り執筆する行為自体を個人に帰属させることが、文書作成機関における権威を象徴していたからであろう。つまり、机上の紙・筆・墨・硯を使用して文字を記すという一連の行為を個人が集約し執り行うことは、多数の人員により多量の文書を作成・管理を司る行政機関にすれば、その存在意義を示す最も象徴的な行為である。そのため、硯は個人の所作に伴うものであることから、特殊硯など硯面の小さく低い硯の方が充分な効力を発揮したものと考えられる。その際、紙・筆・墨は厳格に管理されていたことが指摘されており（綾村1988）、圏足円面硯の普及率を比較すれば希少性のある特殊硯を優先して採用したものと想定できる。したがって、水滴はその舞台装置としての文房具類の一つとして評価できるであろう。

このような行為と道具の個人所有が同一化したものが傾斜硯、風字硯や長方硯の出現と捉えられるであろう。古代東海道西部では灰釉陶器の小型平瓶が、風字硯などの陶硯類に水滴のひとつとして使用されたことであろう。

4　結　語

小型平瓶の検討を通じ、水滴としての機能・歴史的特質を整理した。

遠江・駿河・伊豆国での小型平瓶Ⅲ類は、陶硯類の様相を勘案すると多様な陶硯類を保有する遠江国西部の官衙遺跡でのみ確認でき、圏足円面硯を主体に陶硯が構成される駿河・伊豆国の各遺跡では小型平瓶は出土しないことを読み取ることができる。したがって、Ⅲ類は圏足円面硯ではなく、特殊硯や硯面の低い定形硯に使用された水滴であると指摘した。また、水滴は8世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い機能が確立し、文書行政における権威を象徴する行為の要素として不可欠な存在であったと評価した。

一方、小型平瓶Ⅲ類を水滴として使用したと考えられるのは遠江国西部で顕著に確認できるが、その地域以外の遠江国や他の古代東海道西部では陶硯類にどのような水滴が主に使用されたかは判然としない。都城では平瓶形以外にも横瓶形・長頸瓶形などの小型品が水滴としての用途が含まれる可能性を示唆している。また、水滴は正倉院文書をみるかぎり硯のような主要な調度ではなく通常は筆洗にあたる「筆漬杯」等から硯水を得ていたとの指摘もある（北野 2005）。さらに、法隆寺献納宝物には表面に鳳凰・宝相華唐草などを精細に彫り込んだ金銅製小壺型水滴があり、『栄華物語』・『枕草子』などの文献資料からは金属製・ガラス製・青磁の水滴が記載されている（原田 2001）。絵画資料でも『源氏物語絵巻　夕霧』に小壺型注口付の水滴が描かれている（小松 2001）。

水滴は多くの素材により成立していることが判明するが、その様相の具体像にこれ以上迫ることは難しい。今後も多様な古代社会を示す陶硯類をはじめとする考古資料を精緻に分析し、新たな情報を加えて検討を積み重ねる作業が求められるであろう。

註

1　Ⅳ類は口縁端部の特徴などから灰優陶器との関連が推定される。また、今回は対象から除外したが、灰釉陶器の平瓶は須恵器よりも法量が拡大する傾向がみられる。これらを勘案すると、Ⅳ類及び灰釉陶器の平瓶は風字硯との関連を考慮する必要があるだろう。

2　伊場遺跡群内では物資集散施設と捉えられている鳥居松遺跡で提瓶硯が確認されている。

参考文献

愛知県史編纂委員会　2010 『愛知県史　資料編4　考古4　飛鳥～平安』愛知県

綾村　宏　1988 「筆・墨・硯が表す社会」『日本の古代14　ことばと文字』中央公論社

生田和宏　2003 「城柵官衙遺跡における陶硯の様相」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

小田和利　2003 「地方官衙と陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

尾野善裕　2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会

小幡早苗　2005 「三河における古代陶硯の展開」『考古遺物から見た古代三河』三河考古学談話会

角正芳浩　1999 「斎宮跡の硯」『斎宮歴史博物館　研究紀要八』斎宮歴史博物館

笠井賢治　2004 「伊賀地域の円面硯に関する覚書」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会

神野　恵・川越俊一　2003 「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

北野博司　2005 「文房具」『文字と古代日本2』吉川弘文館

古代の土器研究会　1997 『7世紀の土器（近畿東部・東海編）』

小松大秀　2001 『日本の美術　第424号　文房具』至文堂

齊藤孝正　1990 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相」『名古屋大学文学部研究論集107』

齊藤孝正・後藤建一　1995 『須恵器集成図録　第3巻　東日本編Ⅰ』雄山閣出版

鈴木敏則　1998 「第5章　古墳時代後期～律令時代の土器」『梶子北遺跡　遺物編（本文）』浜松市文化協会

鈴木敏則　2000 「古墳時代湖西窯編年の再構築に向けて」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会

田中広明　2004 「七世紀の陶硯と東国の地方官衙」『歴史評論　第655号』歴史科学協議会

東海土器研究会　2000 『須恵器生産の出現から消滅』

楢崎彰一　1982 「日本古代の陶硯」『考古学論考』平凡社

奈良文化財研究所　2003 『古代の陶硯をめぐる諸問題』

西口壽生　2003 「畿内における陶硯の出現と普及」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

原田一敏　2001 「水滴の歴史」『日本の美術　第424号　文房具』至文堂

松田留美　1997 「長岡京出土の陶硯」『都城8』向日市埋蔵文化財センター

丸杉俊一郎　2008 「地方官衙における徴税形態の様相」『静岡県考古学研究40』静岡県考古学会

宮瀧交二　2001 「日本古代の「筆記具」と権力」『歴史評論　1月号』校倉書房

遺跡文献

愛知県教育委員会　1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』
愛知県教育委員会　1981 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅱ）』
愛知県教育委員会　1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』
愛知県埋蔵文化財センター　1990 『志貴野遺跡　小島遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター　1991 『大渕遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター　1994
『黒笹 40・89 号古窯跡黒笹 G2 号古窯跡　立楠古窯跡』
愛知県埋蔵文化財センター　1999
『細口下 1 号窯　鴻ノ巣古窯　高針原 1 号窯』
愛知県埋蔵文化財センター　2001 『八王子遺跡』
可美村教育委員会　1981 『城山遺跡調査報告書』
吉良町教育委員会　2008 『寄名山遺跡発掘調査報告書』
湖西市教育委員会　1990 『吉美中村遺跡発掘調査報告書』
湖西市教育委員会　1992 『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』
小牧市教育委員会　1976 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』
小牧市教育委員会　1979 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』
小牧市教育委員会　1982 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ』
小牧市教育委員会　1994 『篠岡 112 号窯発掘調査報告書』
斎宮歴史博物館　1988 『斎宮跡発掘資料選』
斎宮歴史博物館　1992 『史跡　斎宮跡』
斎宮歴史博物館　1995 『史跡　斎宮跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007 『井通遺跡』
豊橋市教育委員会　2002 『二川古窯址群（Ⅱ）』
名古屋市教育委員会　1976 『徳重西部地区土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』
名古屋市教育委員会　1983 『NN-268 号窯跡発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会　1989 『NN-259 号窯跡発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会　1994 『鳴海地区　須恵器窯跡調査報告書』
奈良文化財研究所　2006 『平城京出土陶硯集成Ⅰ』
奈良文化財研究所　2007 『平城京出土陶硯集成Ⅱ』
日進町教育委員会　1978 『折戸 80 号窯発掘調査報告書』
日進町教育委員会　1984 『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
浜松市文化振興財団　2012 『宮竹野際遺跡 6 次』
牧之原市教育委員会　2008 『天の川遺跡』
三重県教育委員会　1974 『斎王宮跡発掘調査報告Ⅰ』
三重県教育委員会　1989 『昭和 61 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
三重県教育委員会ほか　1991 『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告　第 3 分冊 4』
三重県埋蔵文化財センター　1992 『城之越遺跡』
三重県埋蔵文化財センター　1996『居敷遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター　2002 『川島遺跡群（第 1 次）発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター　2002 『六大 A 遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター　2003 『覚正垣内遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター　2008 『立花堂遺跡発掘調査報告』
三好町教育委員会　1988 『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
三好町教育委員会　1992 『黒笹第 11 号窯発掘調査報告書』
三好町教育委員会　1995 『黒笹 44 号窯・北畑遺跡発掘調査報告書』
四日市市教育委員会　2013 『久留倍遺跡 5』

図出典

図 1　筆者作成、下記窯跡資料を各報告書より計測・編集
（湖西窯）東笠子 44 地点
（猿投窯）
高針原 1 号窯・I-17 号窯・I-41 号窯・K-44 号窯・O-80 号窯・K-1 号窯・NN-265 号窯・NN-266 号窯・K-11 号窯・I-101 号窯
（尾北窯）
S-78 号窯・C-2 号窯・S-81 号窯・高蔵寺 2 号窯・S-112 号窯・S-2 号窯
（その他）上尾戸窯
図 2・3・5　報告書から引用・編集
図 4
筆者作成、丸杉 2008 を参考に各報告書より計測・編集

【資料紹介】

藤枝市中ノ合遺跡から出土した扉板について

中川律子

要旨　藤枝市中ノ合遺跡は志太平野の北東部に位置する集落遺跡である。調査原因となった新東名（第二東名）高速道路の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査では葉梨川流域に数多くの発見をもたらした。瀬戸川層群から続く丘陵の裾に築かれた弥生時代後期から古墳時代の集落と低湿地に広がる水田、低丘陵地には須恵器窯や古墳時代の後期群集墳など、当地域の新しい資料が著しく増加した。それらを再整理するなかで中ノ合遺跡から出土した木製品のなかに扉板があることが判明した。接合して扉板となった木製品資料の再報告をするとともに、県内の類似する木製品を交えて扉板の構造を考えてみる。

キーワード：建築部材、古墳時代前期、寺家前遺跡、志太平野、集落、樹種同定、扉板、中ノ合遺跡、葉梨川

1　はじめに

藤枝市中ノ合（なかのごう）遺跡は静岡県内の新東名（第二東名）建設工事に伴って埋蔵文化財の発掘調査が行われた。中ノ合遺跡は当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成 12 年から平成 15 年にかけて現地調査を実施し、その後、資料整理を経て、平成 22 年 3 月に発掘調査報告書が刊行されている。

今回は平成 21 年度に刊行した『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』（以下、『中ノ合遺跡』）で報告された資料のうち、第 85 図 314 と第 86 図 315 は接合することが明らかとなったため、この木製品の再報告を目的とする。また遺跡周辺部の葉梨川流域でも関連する資料が発見されていることから、これら資料をまとめて紹介する機会としたい。

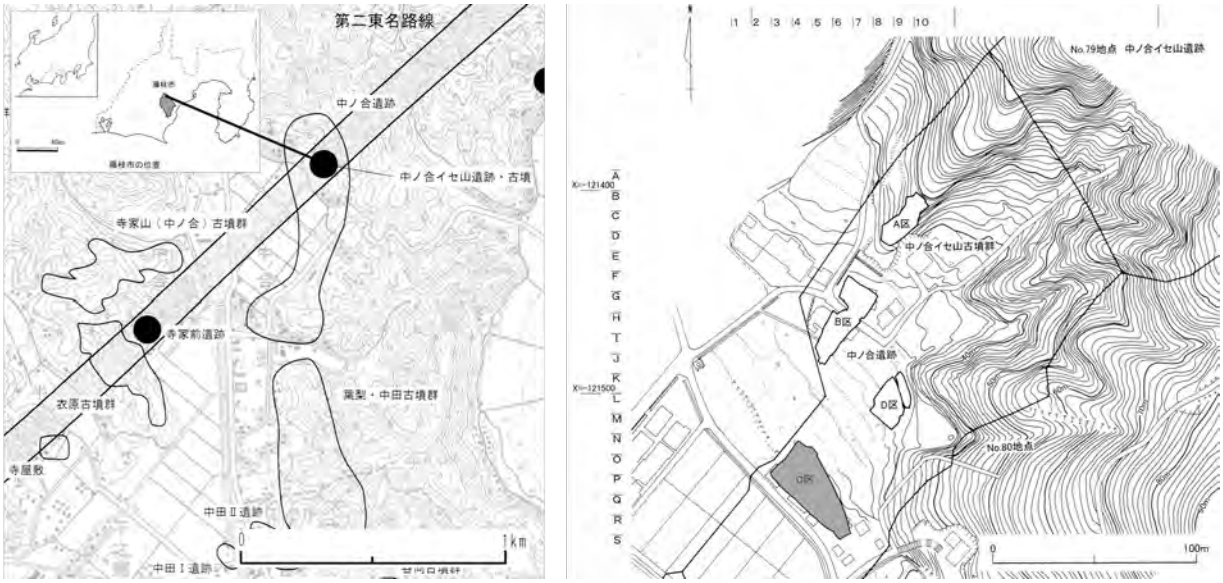


図１　遺跡位置図と中ノ合遺跡Ｃ区

２　遺跡の概要

中ノ合遺跡は藤枝市中ノ合に所在する。藤枝市北東部の天王山から南東に派生する丘陵と葉梨川左岸との間の沖積微高地上に位置する（図 1）。遺跡は現在の中ノ合地区にあり、葉梨川の中流域にあたる。瀬戸川丘陵に端を発する葉梨川は、今現在、遺跡から直線距離にして 350 mほど離れている。しかし弥生時代から古墳時代当時の葉梨川は丘陵裾の微高地縁辺部を大きく蛇行しながら中ノ合遺跡の南西側を流れていたと思われる。遺跡調査前の当地は、葉梨川から丘陵の麓へ水田が広がり、丘陵裾に住宅等が点在していた。こうした場所に新東名の本線部分が架かることになり、平成 12 ～ 15 年度にかけて発掘調査を実施した。その結果、丘陵裾のＣ区では竪穴住居跡 11 軒と掘立柱建物跡１棟のほか、性格不明の遺構６基、小穴、土坑、溝など、居住域に伴う遺構群が検出された。見つかった遺構の年代は竪穴住居跡に伴って出土した土器の年代からすると古墳時代前期が主体である。当時も居住域であり、土地利用は現代とさほど変わっていないことが言える。

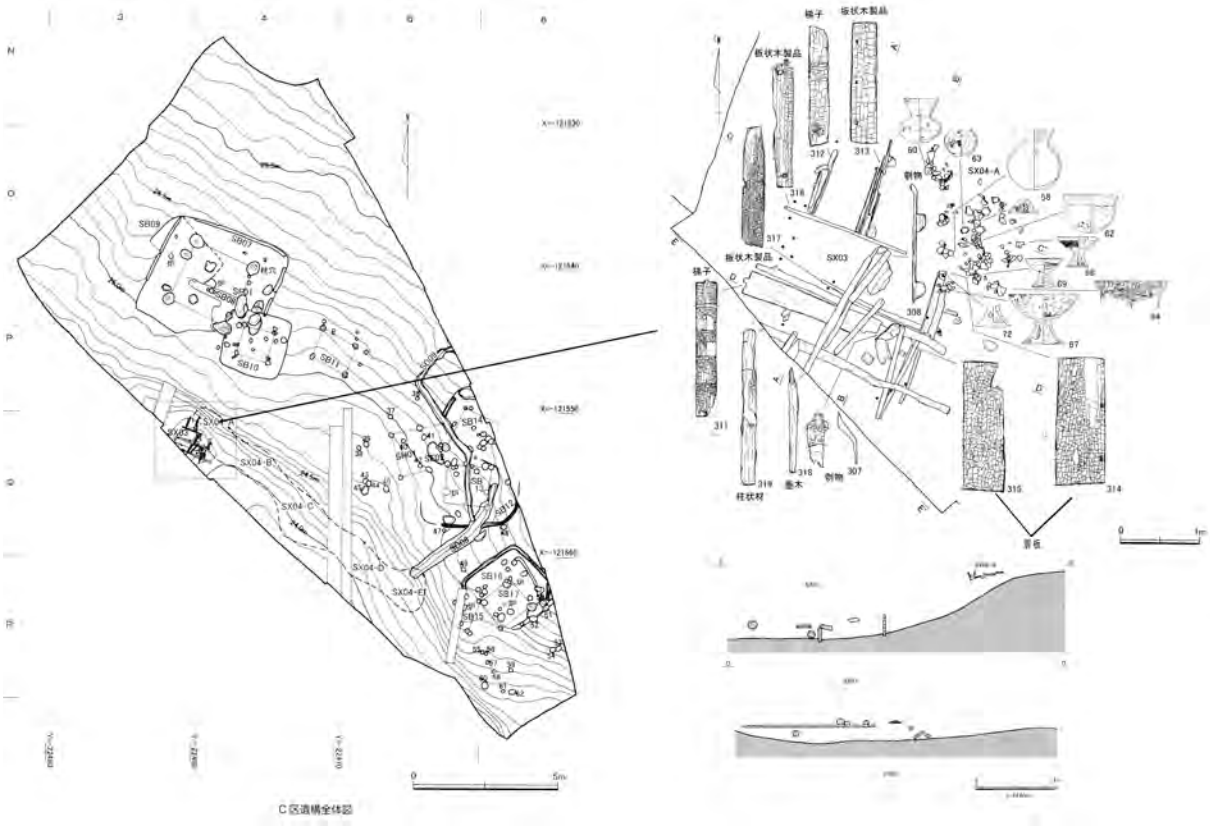


図２　中ノ合遺跡Ｃ区全体図と性格不明遺構ＳＸ 03

写真１　中ノ合遺跡Ｃ区

写真２　中ノ合遺跡ＳＸ 03

写真３　中ノ合遺跡扉板表面

写真４　中ノ合遺跡扉板裏面

写真５　中ノ合遺跡扉板上端部

写真６　中ノ合遺跡扉板下端部

中ノ合地区ではこれまでに藤枝市教育委員会による市道改良工事に伴う発掘調査や財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による新東名建設工事に伴う発掘調査が行われている。今回の調査区よりも 400 mほど南側では昭和 59 年に市道中ノ合・山根線の道路改良工事に伴う確認調査で遺跡が発見され、昭和 60 年に藤枝市教育委員会が中ノ合遺跡の包蔵地内を調査している（藤枝市 2007）。また葉梨川を挟んだ対岸では新東名建設工事に伴い平成 11 ～ 18 年度（平成 14 年度は途中中断）にかけて寺家前遺跡の発掘調査が行われている。寺家前遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺構や水田遺構などが見つかった。寺家前遺跡のさらに西側にある低丘陵上も新東名建設に伴って遺跡調査が行われ、衣原遺跡・衣原古墳群・衣原古窯群の発見が相次いだ。中ノ合地区より２㎞ほど南下した低湿地では、昭和 53 年に藤枝バイパスの建設工事に伴い、上薮田モミダ遺跡と上薮田川の丁遺跡の調査が実施されており、弥生時代後期の集落遺構が見つかっている。

３　「扉板」について

（１）出土状況

中ノ合遺跡のＣ区では丘陵裾から低地へと続く微

高地上で竪穴住居跡等の遺構を検出した。住居跡から南西方向への地形は徐々に下がり、現地形もこの付近から南西は低湿地となっている。調査区内でも標高 24.5 m付近から南西方向へ急激に落ち込んでいる。この微高地から低地へと変わる縁辺部で性格不明遺構 SX03 が見つかっている。

性格不明遺構 SX03 は竪穴住居ＳＢ 10(標高 25.2 m、面積 18.1 ㎡）から南西側へ下がった低地付近で検出し、盛土、杭列、木製品、石等によって構成された木組み遺構である（図 2、写真１・２）。上層では土師器の集積 SX04 を検出し、SX03 はその土師器を取り除いた下層より見つかっている。『中ノ合遺跡』報告書内の第 85 図 314 と第 86 図 315 は、この木組み遺構の一部に使用された状況で出土している（図 2)。第 85 図 314 は南北方向の列状に配された木製品のひとつで、板の側面を立てた状態であった。第 86 図 315 も近接した位置で見つかっている。出土状況から推察すると扉板は本来の役目を終えてから分割され、木組み遺構へ廃材利用されたものと考えられる。なお木組み遺構の性格については明らかになっていない。遺構の周囲から土師器の集石や種子核が多く見つかっていることから、祭祀的な意味合いを持つ場所であった可能性もある。

（２）形態

『中ノ合遺跡』報告書の第 85 図 314 と第 86 図 315 を接合すると図３（写真３・４）のような形状になる。接合した扉板は長方形の板状を呈する。長さ 87.4 ㎝、幅 61.0 ㎝、縦横の比率は６：４と身幅の広い板である。板は最大 3.0 ㎝ほどの厚みを持つスギの柾目材を使っている。木目からみると比較的木芯部に近いところを使っていることがわかる。木目から推察するに原木の直径は推定１m以上あっただろう。右側面寄りには２箇所の枘孔が設けられている。枘穴の形状は縦 3.3 ㎝、横 1.6 ㎝程の長方形である。板の表面には右端に開けられた２箇所の枘孔以外には特別な細工は見られない。また板の表面はどちらか片面が著しく風化していると言うこともない。

板上端部の左端には円柱形の突起があったと思われるが折損している（写真５)。この突起が出入り口の楣または蹴放しの扉軸孔に差し込まれる軸部にあたる。対する左下端部には側面から抉りこまれた加工がある(写真６)。この部分は破損しているため、もとの形状が分かりにくいが、図 3 の復元想定線のように、板側面から大きく湾曲状に抉り込んだ加工が施され、これにより軸部のように突出した部分を作

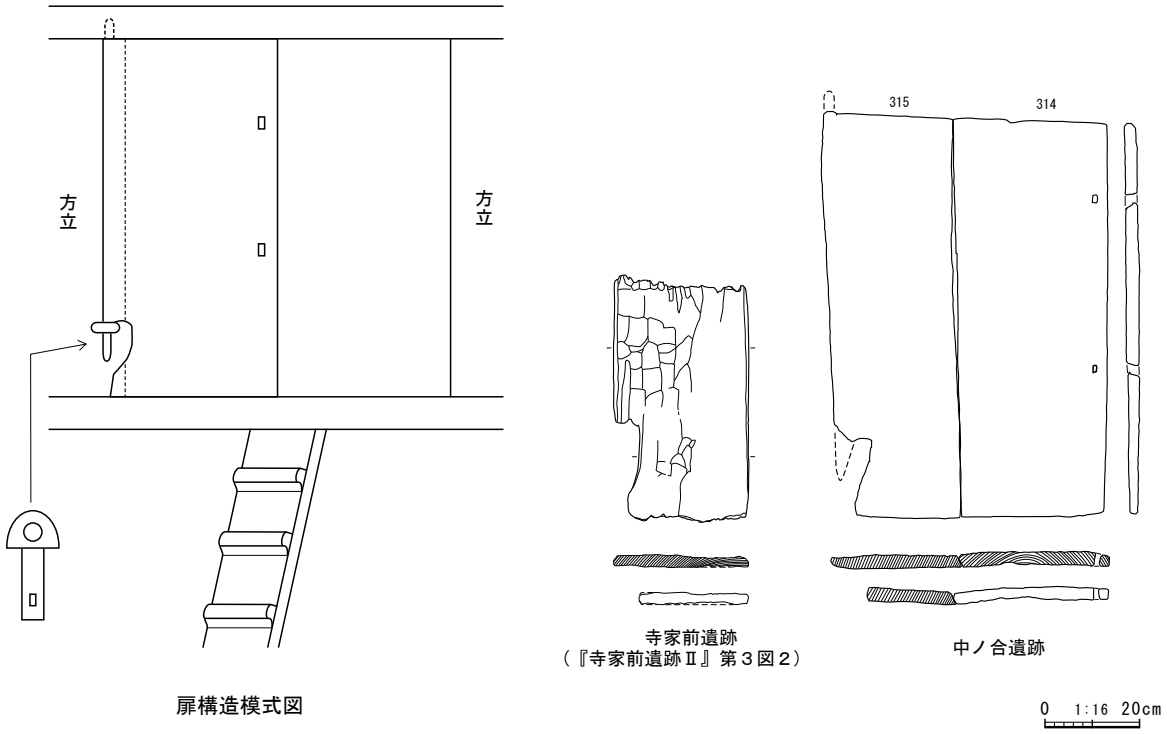
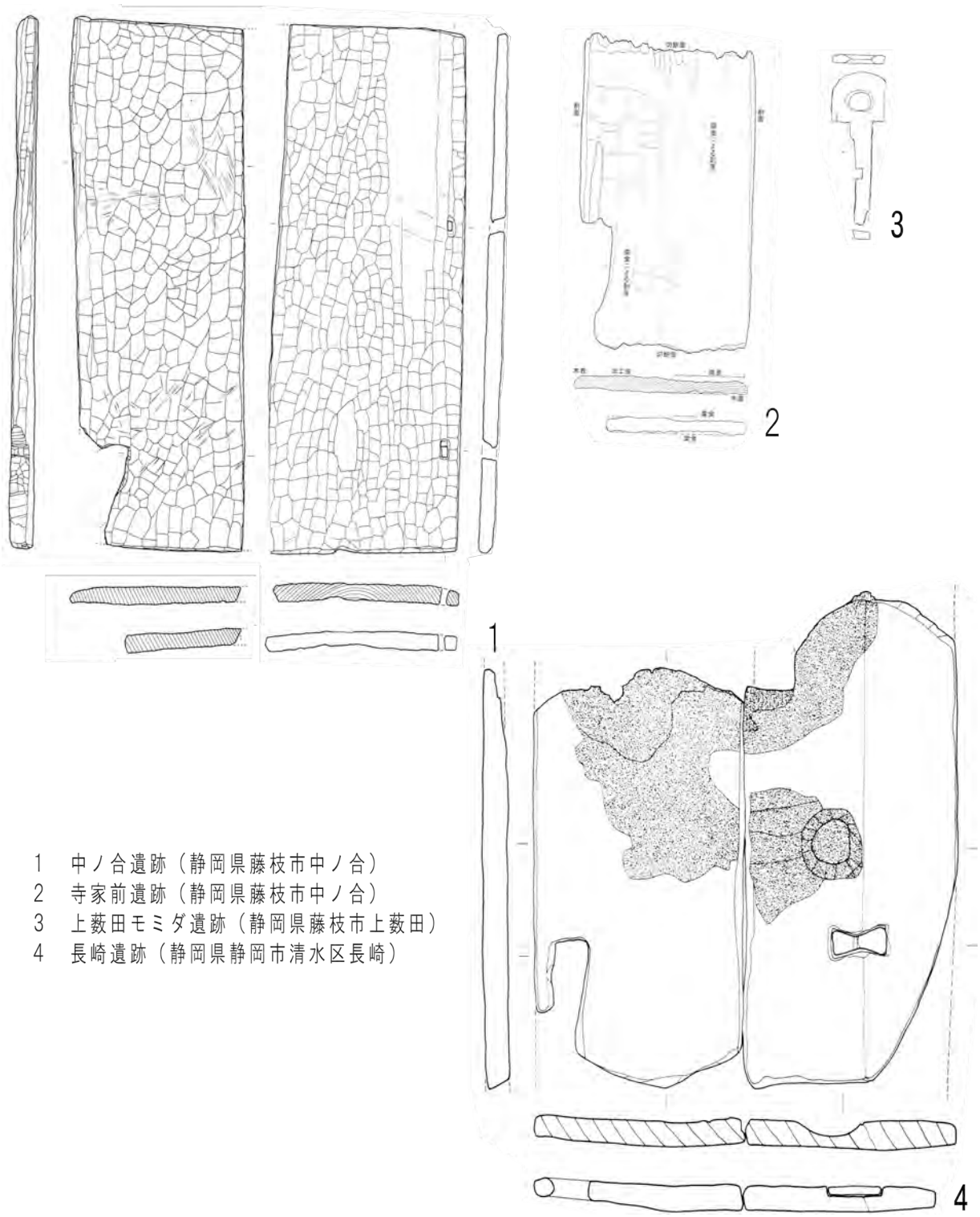


図 3　扉構造模式図



1　中ノ合遺跡（静岡県藤枝市中ノ合）
2　寺家前遺跡（静岡県藤枝市中ノ合）
3　上薮田モミダ遺跡（静岡県藤枝市上薮田）
4　長崎遺跡（静岡県静岡市清水区長崎）

図４　静岡県内出土扉板と関連木製品（Ｓ＝1/10）

表１　静岡県内出土扉板類似例

番号	遺跡名	市・町名	器種名	表面状態	樹種名	時代	備考
1	中ノ合遺跡	藤枝市	扉		スギ	弥生時代後期	
2	寺家前遺跡	藤枝市	扉		スギ	弥生時代後期	
3	上薮田モミダ遺跡	藤枝市	栓			弥生時代後期	
4	長崎遺跡	静岡市	扉	炭化	スギ	弥生時代後期	

り出している。図３には扉板の構造模式図として使用されていた状態を想定してみた。扉板の左側上下端部にある軸部は楣または蹴放し、方立等に固定するための加工であり、右端にある２箇所の枘孔は扉の開閉に必要な把手または紐などを取り付けるための加工なのであろう。本図では抉り込みのある軸部を下に置き、板を縦に配しているが、上下逆の配置も考えられるだろう。縦横比からして横に配する蔀板にも似ているが、上下の軸部が同じ形状ではないことから、本模式図は縦に配する板とした。

（３）樹種

扉板は樹種同定結果が報告書に掲載されているとおり、スギの柾目材である。静岡県内の出土建築部材は弥生時代後期から古墳時代初頭および古墳時代前期の年代に、スギの大径木を使って製作加工することは決して珍しいことではない。中ノ合遺跡の南に広がる志太平野や安倍川流域の静岡平野でもこうした木材利用はごく一般的なことである。今回の資料が接合したことにより木取りを見ると、少しでも幅のある板を取るために直径１ｍを超える原木材から最も木芯部に近いところを選んで製材していたことがわかる。

（４）類似例

扉板は左右どちらかの上下端部に軸部を作り出している形状が従来一般的に知られているが、ここ最近、中ノ合遺跡の扉板のような形状の軸部をもつ製品が少しずつ増えて来ている。中ノ合遺跡の西側に位置する寺家前遺跡では弥生時代後期後半期の掘立柱建物の柱穴より礎板に転用された同じ形状を持つ扉板が見つかっている（図４－２）。また２㎞ほど南にある上薮田モミダ遺跡（弥生時代後期）からは軸部を受ける部材と思われる木製品が出土している（図４－３）。静岡平野の北東部に位置する長崎遺跡（弥生時代後期）からも同形の扉板と思われる木製品が出土している（図４－４）。

（５）扉板の用途と問題点

中ノ合遺跡の扉板は掘立柱建物の出入口などに取り付けられた建築部材のひとつであったことは間違いないだろう。しかし（２）形態の稿でも述べたとおり、扉板であったのか蔀板だったのか、現段階でどちらか特定することは難しい。仮に扉板であったとしたら、どのように取り付けられていたのか。また上下に円柱状の軸部を持つ扉板とは何が違うのか。組み合う楣または蹴放し、方立等は周辺遺跡から見つかっておらず、県内の類例資料も少ないため、扉の構造はまだ不明な点が多いのが現状である。

４　おわりに

今回は『中ノ合遺跡』の報告書に掲載された木製品が接合し、扉板と判明したことをきっかけに再報告をした。また中ノ合遺跡の周辺遺跡から出土した類似例を合わせて紹介した。時間的な制約もあり県内の一部の資料を紹介したに過ぎないが、今後も類似する資料を丹念に探して検討していく必要がある。こうした資料を集積していくことにより、当該期の木製品加工の技術や地域的な様相が判明していくことに繋がるだろう。

参考文献

藤枝市埋蔵文化財調査事務所　1981 『国道１号藤枝バイパス＜藤枝地区＞埋蔵文化財調査報告書第６冊　上薮田モミダ遺跡・上薮田川の丁遺跡・鳥内遺跡』藤枝市教育委員会

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992 『長崎遺跡Ⅱ（遺構編）本文編』

守山市教育委員会　2001 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』

山田昌久編　2003 『考古資料大観８　弥生・古墳時代　木・繊維製品』小学館

宮本長二郎　2007 「№490　出土建築部材が解く古代建築」『日本の美術３』至文堂

藤枝市史編さん委員会　2007 『藤枝市史　資料編１　考古』藤枝市

島田敏男他　2010 『遺跡出土の建築部材に関する総合的研究』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

島田敏男他　2010 『出土建築部材における調査方法についての研究報告』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所他　2010 『中ノ合イセ山遺跡・中ノ合イセ山古墳群・中ノ合遺跡』

静岡県埋蔵文化財センター他　2013 『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』

静岡県埋蔵文化財センター他　2014 『寺家前遺跡Ⅳ（弥生時代後期～古墳時代前期・総括編）』

静岡県埋蔵文化財センター
研究紀要　第3号
2014年12月19日

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002
静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261

印　刷　　みどり美術印刷株式会社

〒410-0058
静岡県沼津市沼北町2-16-19
TEL 055-921-1839